

Ⅶ 遺物の観察

1. 鏡 類

鏡類は3面。2面は石枕上にあり、1面は石枕下で西内壁に立てかけた形であった。棺身の基底部調査のとき、西側割石積みの中から出た石枕様の石材は、長さ50cm・幅23cmで、頭部はまだ彫り込んでいない。その石材の幅23cmでは、頭部の彫り込みを作れば、鏡の置き場所がなくなる。それで石室西側の割石積みの中へ捨てられたのかもしれない。

熊本県玉名郡院塚古墳3基のうち、最高位の被葬者とみられる3号舟形石棺は内壁と石枕上の間が20cmあり、その間に布目の付着した神獸鏡1面のおかれていた例がある^①。

(1) 内行花文鏡 (第15図)

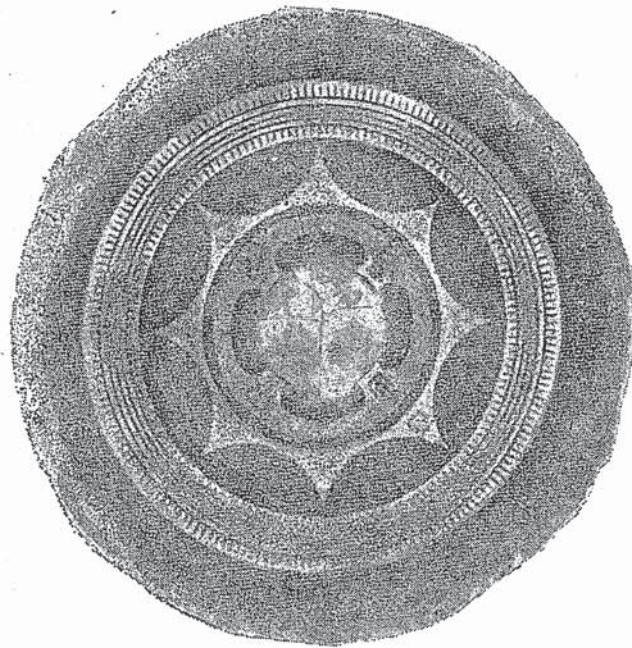
径17cm。幅1.8cmの平縁がまわる。外区は幅4.5mmの円文内で櫛歯の間1.5mmの櫛歯文帯と幅3.5mmの円文内で1.5mmおきの櫛歯文帯の中に三線の有節重線文帯がめぐり、径4mmの円文が三線の外側線と内側の3.5mm幅の櫛歯文帯に接し、円文の両側に二線がところどころで等間隔で円文を挟む形となるが、文様がやや磨滅して明らかでない。内区は四葉文鈕座を中心にめぐる幅3mmほどの太い円文と外区の間内行八花文がある。花文の間に径5mmの円文と山字状の文様が交互につく。四葉文の間に「長宜子孫」の銘がある。鏡面の反りは鏡端で4mm。鏡面に薄手と厚手3種類以上の布痕があり、鏡縁にちょっと房々した糸片がついていて驚かされた。やや丸味をもった素鈕の穴は周りが青錆を帯びるのに紐を通していたせいか鈕の穴は銀色に光る。

田川市伊加利の内行花文鏡で、外区の有節重線文帯は円文と斜行線がめぐり、その点は向野田の鏡とやや似たところがある^②。田川市のは仿製か。岡山県花光寺山古墳の内行花文鏡で、内区八花文の間にある山字状は下の線が円弧をなし、両端へはみだし、渦巻様の円文の先は双葉のように分かれている^③。八花文の間の山字状や双葉状の文様について各鏡の間に変化があるけれど、天をかたどる蓋笠を表現した8連の円弧と、それを支える柱やその幕をしぼった紐をあらわす円弧間の小単位文様からなる主文とする見方があり、興味をひく^④。

向野田の内行花文鏡は古式の内行花文精白鏡でなく、後漢時代に作成の行なわれた長宜子孫内行花文鏡に属する。

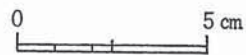
(2) 方格規矩鳥文鏡 (第16図)

径18.4cm。幅約5mmの平縁がまわる。平縁内側に幅2mmの沈線がめぐり、幅1.9cmの外区に、鋸歯文帯(幅6mm)・複線の波文帯(幅4mm)・鋸歯文帯(幅5mm)・櫛歯文帯(幅4mm)がめ



第15図 内 行 花 文 鏡

ぐる。鋸齒文の三角形底辺3~4mm、外側の鋸齒文帯の鋸齒文がわずか大きめである。幅7mmの銘文帯に「青同(銅)作竟(鏡)明大好長生宜子孫」と12字の銘文がある。内区は円線と複線方格(幅4mm)の間にTLV文が複線でつく。Tの両側に円点をもつ円圈座乳、TLと両側のVの間に頭をV側に向けたほぼ同形の鳥形線文が配される。鳥文は鳳凰の流れであろうか。複線方格(外側一辺長さ6.4cm、内側5.5cm)と小さな四葉変形文が方格四隅に向いつく径3.4cmの素鈕を囲む単線方格(1辺4.2cm)の間に、小さな円点をもつ円圈座乳12個があり、その乳と乳の間の一辺に3字ずつ十二支の文字が配される。子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥 このうち不明の字が4字ほどあり、申の字の中央縦線がない。外区の鋸齒文をはじめ素鈕(径3.4cm)の断面ほぼ長方形の穴両端などに一部鑄くずれがある。Vの図形がやや開きすぎ、L字文が左向となっている。鏡面の反りは鏡端で5mm。線文の表出もよく、鑄上がりのよい方であろう。鏡面にかなり布痕が残る。鏡背に青錆のほか何故か藍色に色



第 16 図 方 格 規 矩 鏡

の変わったところがある。

京都府椿井大塚山古墳の方格規矩四神鏡は径18.2cm、その外区やL字文の向きなどの点で向野田の^⑤と似ている。鳥文も頭部辺にやや似たところがみられる。また東京国立博物館蔵、出土地不明の王氏作波文帯方格規矩鏡は径5寸3分(16.6cm)、外区が似ているが、L字文は右向で、八禽であるけれど、その図像はかなりちがうようである^⑥。

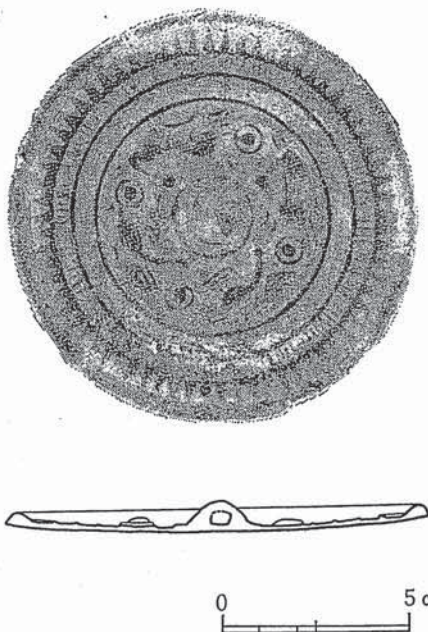
方格規矩四神鏡は前漢末から三国時代に行なわれた鏡式といわれ、向野田の鏡はその系統につながり、後漢のものとみられる。山越茂氏による方格規矩四神鏡の分類によれば、鳥形を主文としており、その第九式にあたるのではないかと思われる^⑦。

天円地方を象った鏡の円い形と中央の方格の間に、それをつなぐ柱梁を象徴する内区のT形文があり、その両側に乳を配することがある。また大地を象った中央の方形には、船載鏡では

方位をあらわす十二支が文字で記入されることが多いといわれる。^⑧

(3) 鳥獸鏡(第17図)

径11.2cm。半三角縁というより半円に近い蒲鉾縁。外区は鏡縁へかけ幅約7mmの外行鋸歯文帯、鋸歯文の三角形底辺約3mm、つぎに幅5mmの櫛歯文帯、櫛歯の間1.5mm~2mm。そして幅6mmの銘帯にあたとみられる無文帯が続く。内区は素鈕円座の周りに4個の円圈座乳があり、乳と乳の間に鳥が2羽、鹿のような獣が2匹続く。鏡面の反りは鏡端で3mm。鏡面に布痕があり、鏡背の外区4分の1ほどに厚手の布痕が残る。



第17図 鳥 獸 鏡

向野田北方近くのチャン山(茶臼山)古墳の鳥獸鏡は径10.5cm。図像もすぐれ、外区は連環文帯・外行鋸歯文帯・櫛歯文帯がめぐり、^⑨ 鑄上りもよく、後漢鏡とみられる。それに比べると、向野田のは図像も生硬で、仿製ではないかと思われる。ともに半肉彫りである。

チャン山の鳥の図像は、長くひるがえる冠羽と長い尾を持っている。「鳳凰の図像の系譜」によれば、その図2の2、図6の2および図像記号の図7の2に似て、現在の金鶏・昔の名前では翟とみられ、後漢では鳳凰とみなされている。^⑩ 向野田の方格規矩鳥文鏡の鳥も冠羽と尾羽根に似たところがある。

かつてチャン山の鏡の鳥獣を、四霊の麟鳳とみたけれど、四神とすれば、朱雀・白虎となろうか。チャン山の場合、鹿の角状に出た頭部は白虎に遠いようである。また朱雀鳳凰の属と区別がむずかしく、先の図6の2は朱雀として掲げられている。

なお、向野田の内行花文鏡、方格規矩鳥文鏡はともに舶載の鏡とみられる。

2. 玉 類 (第18図)

被葬者の両肩の周りから両腕外側付近に多く寄り、両肩上方頭骨両耳脇辺に小さめな管玉と小形勾玉がそれぞれあって、両上腕骨外側に主に大きめな管玉が腕骨に添うような形で集まっていた。また右側骨盤やや北へ小玉がひとつところに集まっていた、割れたものやとり上げた後こわれた小玉もあった。小玉は、一方左脛骨辺まで、他方は右大腿骨辺まで散り、小玉の破碎、分散した痕跡が大小8箇所ほどみられた。小玉とともに三連玉(小玉の3個密着したもの)が12個ほど散っていた。

(1) 勾 玉

胸部左肋骨と左腕骨の間で腕骨に接してあった勾玉は長さ2.94cm、丁字頭、頭部にやや白みがかかる硬玉製(図2)。両側穿孔で、1面の孔は径4mm、他面のは径3.1mm、中心径2.5mmの孔である。一部傷ついたような箇所があるが、本来の凹みかもしれない。

頭部右側のは長さ1.78cm(図4)、左側のは長さ1.61cm(図5)で、ともに両側穿孔、骨盤左側のは長さ1.8mm(図3)で片側穿孔である。孔の中心径1mmほどとなる。背のまるみがC字形に近く、すべて硬玉製で、古式の勾玉に属する^①。

人骨東側で小形勾玉1個が骨盤右側にあり、傍らに玉密集のあとがあるほか、他の3個は頭部両側から上腕骨へほぼ等間隔に散っている。4個とも勾玉の頭を北へ尾の方を南に向けている。

(2) 管 玉

頭部両脇から両肩上へかけ、頭部右側で小形勾玉1個と小さめな管玉10個(図6~15)、左側で小形勾玉1個と小さめな管玉5個(図16~20)、また右肩上に小さめな管玉8個(図21~28)、左肩上の小さめな管玉10個(図29~38)はややこまかく切られている。10個の中、1個は3個分ほどの長さで切っていない(図28)。小さめな管玉と小形勾玉は、個数からみて、頸飾りをなしていたかもしれない。

右上腕骨外側に接し、大きめの管玉22個(図39~60)、左上腕骨外側に大きめの管玉27個(61~87)、両側とも小さめな管玉を含むが、それぞれ主に南北の方向に並び散り、またかたまっている。

管玉の小さめのは長さ3.9mm~27.8mm・外径2.5mm~3.6mm・孔径1.2mm~2.2mm、大き

めのは長さ5.4mm~32.6mm・外径3.1mm~9.4mm・孔径1mm~4.3mmにわたり、碧玉製で、緑青色、暗緑色が主となっている。

両側穿孔の明らかな管玉とくさび形を呈した片側穿孔とみられるものと両端孔径の同じく通ったものがある。小さめな管玉では全て両側穿孔であり、大きめの管玉では片側穿孔が主となっている。両側穿孔の場合も、大きめのははじめ片側穿孔し、その後両側から穿孔したとみられるものがある。

(3) 小玉

右上腕骨外側の管玉群南端から7cmほどおいて小玉がとびとびに下肢の方へ長さ約1mにわたり散っていた。骨盤右側の周りに多く、とくに右側上方に約70個も密集していた。右脛骨外側辺に玉密集の痕跡が大小6箇所ある。

左上腕骨外側の管玉群南端からも15cmほどおいて小玉がとびとびに下肢の方へ長さ約56cmにわたり散っていた。骨盤左側の小形勾玉わきに径約3.5cmの密集跡、左大腿骨外側に幅約5cm~約2cm、長さ約30cm細長く足先の方向にせばまった小玉密集跡がある。

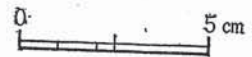
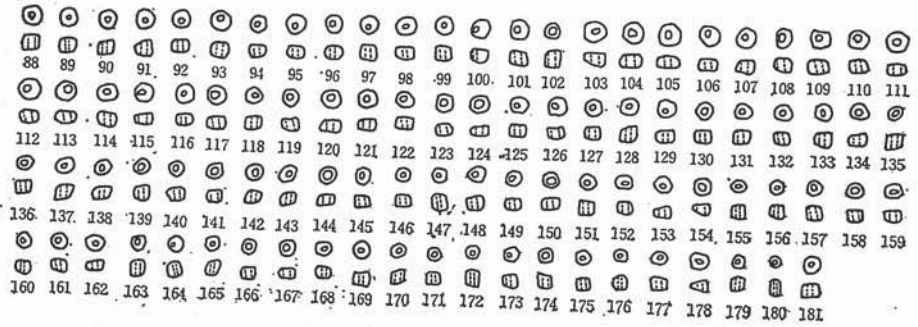
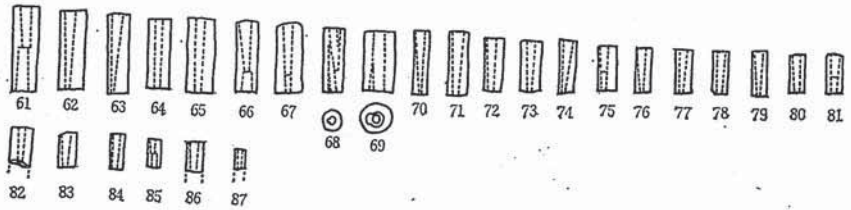
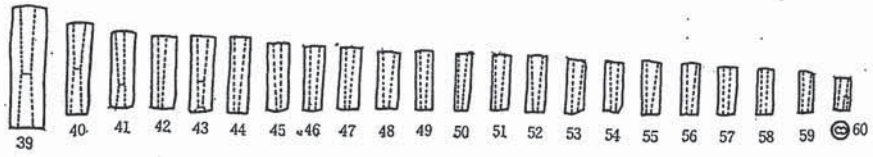
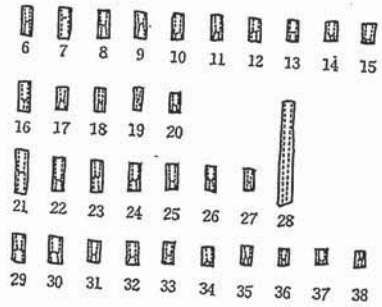
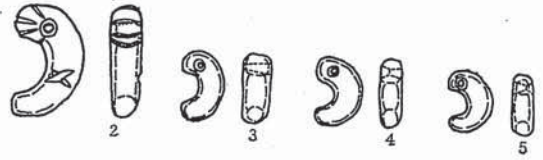
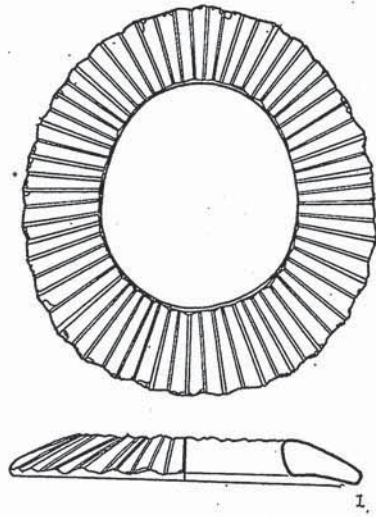
小玉は合計94個(図88~181)が数えられ、密集跡の小玉とともにおそらく数百個あったのではないかと想像される。すき通った淡青色のガラス製で、高さ2.8mm~4.6mm・外径3.5mm~6mm・孔径0.7mm~2.4mmにわたり、不整形なところがある。

小形勾玉を含んだ小さめな管玉が両肩上方へ寄り、大きめな管玉が上腕骨両外側に接し、やや大形の勾玉が左上腕骨内側に、それぞれ集まり、また多くの小玉のうち右側骨盤上方の1箇所はとくに寄っている。胸部内にはみられない。こうした配列が頸飾状を呈していることは察せられるが、勾玉・管玉・小玉の組み合わせやちりかたがどうなっていたのかは疑問がある。

大阪府柏原市国分ヌク谷北塚古墳の粘土櫛内遺物配列実測図の玉類残存の形を見ると、玉2群、玉3群で大きめな管玉は何を根玉としたか明らかでない。残存の形が向野田の大きめの管玉残存の在りかたに似たところがある。2群、3群はもと連条のままで副葬されたと思われる。玉1群は2群、3群の間やや上方に小形勾玉と小さめな管玉が1箇所寄っている。小さめの管玉の在りかたにもやや似たところがある。調査者は着せさせることなく、別個に副葬された^⑩とみられている。北塚の場合、両側の大きめな管玉の南側が工事で切断され、その続きに向野田の場合のように小玉群があったかどうか明らかでない。

小形勾玉と小さめな管玉は、向野田の場合、頭骨西側に勾玉1個・管玉10個、頭骨東側に勾玉1個・管玉5個、左肩上に管玉10個、右肩上に管玉8個があり、一連のものであったらしい。両上腕骨外側の大きめな管玉は、西側に22個、東側に27個と大きめの勾玉1個があり、北塚の例と同じく、一連のものであったろう。そして向野田の場合、東側のやや大きめな勾玉が根玉だったとみられる。

またかなり広く散った小玉の中でとくに骨盤西側で密集した約70個の小玉群が小玉として連



第 18 圖

車 輪 石 · 玉 類

糸していても、どんな在りかたをしていたか。小玉群が右手先の辺にあたり、首飾りとしてのほか手にもまかれたことがあったのではなかろうか。骨盤左側の勾玉は散った小玉の根玉であったとみられる。ガラス製小玉は、現在合計94個あるけれど、実測図の上に西側で70個のほか63個計133個、三連玉4個、割れたもの4個があり、東側で49個、三連玉10個がみとめられた。ほかに小玉の破碎・分散した痕跡が大小8個所ほどある。何故破碎したか、軟質のガラスだったせいであろうか。

向野田の場合、北塚とちがい、人骨をめぐる玉類が分散していた。分散の状況から小さめの管玉と小形勾玉で一連、大きめの管玉と大きめの勾玉でもう一連、ほかに小玉の連糸したものが考えられる。

人骨の周りに分散し、首飾りの玉の緒が切れて散ったという見方が自然なように思われるけれど、その散りかたがヌク谷北塚の例に似たところがあり、着装のままでなく、別に副装されたような疑いもある。向野田の場合、勾玉が4個とも尾が一様に南を指している点で、切れて散ったにしてはややおかしいようである。また小玉が上体でなく、足先の方へかなり広く散っていることも注意される。

玉の緒が切れて散ったか、また切って散らしたか、後者についての説もあるが、その反論もある。

第5表

勾玉計測表

単位 mm

図番号	出土地点	長さ (縦)	長さ (横)	最大幅	孔径		色調	備考
2	左腕の脇付近	29.4	18.5	8.2	4.0	3.1	暗黄緑色	両側穿孔、丁字頭(4本)の沈線、表裏に刻線
3	左骨盤横	18.0	11.1	7.0	2.0	1.2	〃	片側穿孔
4	頭部右側	17.8	12.3	6.1	2.8	2.4	黄緑色	両側穿孔
5	頭部左側	16.1	11.8	5.6	2.7	2.7	暗黄緑色	両側穿孔

第 6 表

管 玉 計 測 表

単位 ㎜

図番号	出土地点	長さ	両 端 部				色 調	備 考
			径	孔 径				
6	頭 部 右 側	7.6	3.0	3.1	1.8	1.9	緑 青 色	両側穿孔
7	"	8.0	3.4	3.2	1.7	1.9	"	"
8	"	7.2	3.0	3.2	1.8	1.7	"	"
9	"	6.6	3.3	3.1	1.8	1.9	"	"
10	"	7.0	3.0	3.0	1.6	1.5	"	"
11	"	6.7	2.8	2.9	1.7	1.6	"	"
12	"	6.0	3.1	3.1	1.7	1.7	"	"
13	"	5.8	2.9	2.9	1.7	1.8	"	"
14	"	5.2	3.1	3.1	1.9	1.5	"	"
15	"	5.5	3.6	3.4	2.1	1.8	"	"
16	頭 部 左 側	8.3	3.4	3.4	1.8	1.6	"	"
17	"	5.9	3.4	3.3	1.8	1.6	"	"
18	"	6.7	3.0	2.8	1.4	1.5	"	"
19	"	6.1	2.6	2.5	1.6	1.4	"	"
20	"	5.3	2.9	2.9	1.5	1.5	"	"
21	右 肩 北 側	11.8	3.6	3.6	2.2	2.2	"	"
22	"	9.2	3.4	3.1	2.0	2.0	"	"
23	"	8.2	3.2	3.2	1.6	1.5	"	"
24	"	7.4	3.1	3.3	1.9	1.7	"	"
25	"	7.0	3.3	3.3	2.0	1.6	"	"
26	"	6.9	2.9	2.8	1.6	1.5	"	"
27	"	5.7	2.7	2.8	1.4	1.2	"	"
28	"	27.8	3.7	3.2	1.5	1.8	"	"
29	左 肩 北 側	7.7	3.6	3.5	2.1	2.1	"	"
30	"	7.4	3.3	3.2	2.1	1.9	"	"
31	"	6.2	3.2	3.3	1.6	1.5	"	"
32	"	6.3	2.9	3.0	1.8	1.8	"	"
33	"	5.5	3.0	3.0	1.5	1.4	"	"
34	"	5.4	2.8	2.8	1.8	1.5	"	"
35	"	4.8	2.8	3.0	1.4	1.4	"	"
36	"	4.6	2.7	2.7	1.4	1.5	"	"
37	"	4.0	2.9	2.9	1.6	1.5	"	"
38	"	3.9	2.8	2.7	1.4	1.4	"	"
39	肩 部 右 側	32.6	9.4	9.0	4.3	3.8	"	"
40	"	24.0	6.6	6.1	2.6	2.7	緑 灰 色	"
41	"	24.0	6.5	6.4	2.7	2.2	"	"
42	"	19.3	6.3	6.4	2.3	1.3	"	(片側二孔)
43	"	20.2	6.5	6.4	2.6	1.3	"	片側穿孔
44	"	20.2	5.6	5.6	3.0	1.4	"	両側穿孔
45	"	18.2	6.8	5.7	1.1	2.3	淡 灰 緑 色	片側穿孔

図番号	出土地点	長さ	両端部				色調	備考
			径	孔径				
46	肩部右侧	17.3	5.3	5.5	2.7	1.5	暗緑灰色	片側穿孔
47	"	16.7	5.5	5.5	2.4	1.6	暗青緑色	"
48	"	15.6	5.0	4.9	2.4	1.2	緑灰色	"
49	"	15.7	4.8	4.8	2.5	1.3	"	"
50	"	15.3	3.9	3.8	2.8	1.6	暗緑色	"
51	"	14.8	5.0	5.0	2.4	1.0	緑灰色	"
52	"	15.0	6.0	5.9	2.4	1.4	緑灰色	"
53	"	14.8	5.0	5.0	2.1	1.3	暗緑灰色	"
54	"	13.5	4.9	4.7	2.2	1.1	"	"
55	"	14.0	4.8	4.9	2.9	1.2	緑灰色	"
56	"	13.8	4.8	4.6	1.9	1.3	"	"
57	"	12.6	5.0	5.1	2.0	1.5	淡灰緑色	"
58	"	12.5	4.7	4.7	2.0	1.5	緑灰色	"
59	"	11.2	3.6	3.6	2.2	1.0	暗緑灰色	"
60	"	9.0	4.3	4.3	2.7	2.2	"	片側穿孔(片側二孔)
61	肩部左侧	22.8	7.0	6.6	3.0	3.3	"	両側穿孔
62	"	21.7	6.9	7.2	2.6	1.4	"	片側穿孔
63	"	21.4	6.2	5.9	3.2	1.5	緑灰色	"
64	"	19.4	6.3	6.2	2.2	1.7	"	"
65	"	20.0	7.4	7.5	2.7	1.6	暗緑灰色	"
66	"	19.2	6.2	6.3	3.2	3.2	暗緑色	両側穿孔
67	"	18.8	6.6	6.6	2.5	1.2	淡灰緑色	"
68	"	17.6	5.8	5.8	2.9	2.4	暗緑色	"(両側とも二孔)
69	"	16.8	8.4	8.3	4.0	2.7	暗青緑灰色	片側穿孔(片側二孔)
70	"	17.0	4.3	4.2	2.3	1.3	暗灰緑色	"
71	"	17.4	5.8	5.6	2.9	1.4	暗緑色	"
72	"	14.6	5.5	5.5	2.2	1.4	"	"
73	"	13.7	5.5	5.6	2.3	1.5	"	"
74	"	14.1	4.6	4.5	2.5	1.4	"	"
75	"	12.3	5.2	5.0	2.5	1.5	"	両側穿孔
76	"	12.0	4.8	4.7	1.9	1.4	暗灰緑色	片側穿孔
77	"	12.1	4.5	4.5	2.2	1.5	暗緑灰色	"
78	"	11.7	4.4	4.5	2.7	1.6	緑灰色	"
79	"	12.5	4.2	4.1	2.3	1.4	淡緑灰色	"
80	"	10.8	4.5	4.6	2.0	1.7	淡灰緑色	"
81	"	10.6	4.3	4.3	2.2	1.2	"	両側穿孔
82	"	10.2	5.8	5.7	2.0	1.5	暗緑色	片側穿孔?(欠失)
83	"	9.4	4.5	4.5	1.9	1.6	緑灰色	片側穿孔
84	"	9.4	3.7	3.7	2.7	1.8	"	"
85	"	7.9	3.2	3.4	1.6	1.6	灰緑色	両側穿孔
86	"	8.5	4.6	4.4	2.4	1.5	暗緑色	片側穿孔?(欠失)
87	"	5.4	3.1	3.2	1.5	1.3	青緑色	"?(欠失)

第 7 表

小 玉 計 測 表

(色調は全て淡青色)

単位 mm

第18図 番号	高さ	幅	孔 径	第18図 番号	高さ	幅	孔 径	第18図 番号	高さ	幅	孔 径
88	4.4	5.1	1.8	120	3.2	5.0	1.7	152	3.6	4.5	1.4
89	4.2	4.9	1.0	121	3.4	4.8	1.7	153	3.4	4.6	1.6
90	4.1	4.7	0.9	122	3.4	4.9	1.2	154	3.4	4.9	2.0
91	3.9	5.1	1.2	123	3.0	4.8	1.7	155	5.8	4.0	1.1
92	4.0	4.8	1.4	124	2.9	5.3	2.4	156	3.9	3.7	0.9
93	4.4	5.1	1.1	125	3.5	4.3	1.5	157	3.8	4.0	1.3
94	3.4	4.3	1.2	126	2.9	4.7	2.1	158	3.5	4.1	1.7
95	3.4	4.8	1.7	127	3.3	4.2	1.7	159	3.5	4.5	1.7
96	3.3	5.0	1.1	128	3.4	4.5	1.6	160	3.3	4.3	1.0
97	4.0	4.7	1.2	129	3.8	4.8	1.5	161	3.4	4.5	1.4
98	3.9	5.1	1.1	130	3.5	4.8	1.4	162	2.8	4.8	1.3
99	4.2	4.3	1.4	131	3.6	4.6	1.4	163	3.9	4.0	1.3
100	3.9	4.6	1.2	132	3.1	4.6	1.4	164	4.0	4.0	0.7
101	4.0	4.9	1.5	133	3.9	4.7	1.4	165	3.6	4.1	0.9
102	4.6	4.1	2.0	134	2.9	5.0	1.7	166	3.1	4.0	1.6
103	3.7	5.5	2.1	135	3.7	4.3	1.6	167	3.8	4.5	1.9
104	3.6	5.8	2.1	136	3.5	4.6	1.7	168	3.0	4.2	1.3
105	3.2	6.0	1.7	137	3.5	4.2	1.6	169	3.9	4.4	1.4
106	3.4	5.5	1.3	138	5.1	3.6	1.2	170	3.7	3.8	1.4
107	3.7	4.9	1.6	139	3.9	4.5	1.4	171	3.2	3.8	0.8
108	3.4	4.8	2.2	140	3.5	4.5	1.2	172	4.5	3.5	1.0
109	3.9	5.9	1.7	141	3.8	4.7	1.7	173	3.5	4.2	1.2
110	3.4	5.0	1.5	142	3.0	4.4	1.6	174	4.0	3.7	1.7
111	2.9	5.8	2.0	143	3.0	4.5	1.3	175	3.6	3.9	1.2
112	3.1	5.2	1.9	144	2.4	4.6	1.6	176	4.0	3.7	1.1
113	3.3	5.3	1.9	145	2.9	4.0	1.3	177	3.6	4.1	1.1
114	3.0	4.8	1.5	146	3.8	4.5	1.0	178	2.8	4.6	1.8
115	3.0	5.0	2.0	147	4.5	4.0	0.9	179	4.4	3.7	1.1
116	3.0	5.0	1.1	148	4.0	4.5	1.4	180	4.4	2.8	1.0
117	3.1	4.8	2.0	149	3.4	4.5	1.4	181	3.9	4.8	1.3
118	3.3	4.8	1.2	150	3.1	4.5	1.9				
119	3.4	4.4	2.0	151	4.0	4.0	1.3				

3. 車 輪 石 (第18図1)

この車輪石は骨盤右脇下、右大腿骨上部に接し、棺内西側壁の間に表を出し、卵形の環体の幅広い方を北にして、乱れた形でなく、置いたような形で見出された。大腿骨に接した所で赤色顔料がたまり、現在も赤色顔料が付着している。

仰臥伸展葬として丁度被葬者の右手首辺にあたり、着装したまま埋葬されたものかどうか、車輪石の在りかたに乱れた所がないようで、埋葬のときに置かれたかという疑いが持たれる。

車輪石の裏面には少しづつ欠けた所があり、また小さな傷がある。なお環体の孔の周りに白い石灰分らしいあとが残る。内孔の中央長径6.0cm、同短径5.1cm、調査見学の女子大生の腕に通ったことがある。環体の幅2cm～2.3cm、稜に0.5mmほどの細い溝が通り、その両側へ扇状に低くなる。稜の刻線は32本を数えた。稜と稜の間のくぼみにも同数の刻線がある。水平においた高さ1.1cm、両端へゆるやかな弧状を呈する。環体の孔は裏へやや斜めに削られるが、厚さ8mm～2mmほどある。長さ縦10.2cm・横9.3cmの完形の碧玉製車輪石である。暗青色の良質の石材で作られている。石質は専門家の鑑定に待ちたい。

弥生時代に用いられたカサガイの貝輪をうつしたという車輪石の表面の文様はカサガイの肋条を形式化したもので、また孔径6cm以下のものが多く、腕を通すのがむずかしく、実用品でなく、宝器的性格のものとされている^⑮。車輪石の古い形式では、(イ)卵形の輪郭、(ロ)幅の広い環帯、(ハ)扁平、(ニ)内孔に向かって傾斜する裏面などのことがあげられている^⑯。新しい車輪石では、刻線を用いずに、面の起伏で装飾を構成したり、また裏面を平らにして、厚手に作られたものもある^⑰。

福岡県沖の島十七号遺跡の車輪石は、放射状の刻線の数にちがいがあられるけれど、2個とも卵形ではなく、円形をなしている^⑱。同飯氏山古墳の車輪石も円形である。熊本県津袋大塚古墳の残欠の車輪石も推定円形を呈している^⑲。なお福岡県沖出古墳の車輪石片がある。

校正中、九州歴史資料館渡辺正気氏から次のご教示をいただいた。「沖出古墳は嘉穂郡稲築町沖出。円墳(人によれば前方後円墳という人も)。数年前調査未発表。福岡県文化課浜田也氏によると、竪穴系横口式石室の中に舟形石棺あり、盗掘にあっていて、出土品は車輪信石・石釧各破片1片のみとのこと。飯氏山古墳のは、福岡市西区飯氏に所在する古墳出土とします。ここには前方後円墳も数基あります。」

「日本原始美術6」の参考図版によると、鳥取県羽合町馬ノ山4号墳の車輪石は卵形で、内孔は円形、稜とくぼみの刻線はそれぞれ30本を数え、向野田古墳の車輪石に近い例として注目される。向野田の場合、その稜とくぼみの刻線はそれぞれ32本、内孔は卵形状となっている。

4. 貝 輪

向野田の棺内被葬者の足先から南へ約50cmへだて、棺内南壁までの間に、棺内南壁からは北へ約70cmの間で、床面に貝輪片が20個ほど散っていた。

貝輪片の散った辺の床面には、やや黒ずんだ赤色顔料がひろまり、その色を帯びた粘土とみられる小粒が一面に目立った。貝輪は完形のものではなく、弧状に欠け、腐蝕から細く薄くなり、粒々が吹きでたようにつき、白みがあり、淡褐色を呈していた。南壁から北へ25cm~40cmほどの間にある2個の貝輪片は長径6cmと6.7cm・幅約6mmで、円形に近い様相を示す。

散った弧状の貝輪の貝の東・北側の欠けたものが多い。また赤色顔料や粘土の小粒などが貝輪片の散った付近に寄っている。被葬者の埋納された棺身が北から南へやや傾斜していることとかかわりがあるだろうか。

手許にある灘貝塚表採の貝輪片も弧状のものであるけれど、放射肋のあるもの、その痕跡のあるもの、磨かれて分からないが、裏面にその痕跡の窺われるものなどがある。向野田の貝輪片はその痕跡すら明らかでなく、弧状を呈したところから二枚貝がほとんどではないかと思われる。専門家の鑑定を待ちたい。

向野田の場合、女性被葬者はすでに車輪石をそなえ、埋葬にあたり、かつて用いた貝輪をその足先の空間に副葬されたものであろう。

校正中、玉名市繁根木、円墳・複室の伝佐山古墳出土3個のアカニシ製貝輪の例について、同市文化財保護委員会田添夏喜委員長からご教示をいただいた。

5. 鉄 器 類

鉄器はすべて石室内壁と石棺外側の間に置かれる。鉄器の種類は剣・刀・刀子・鉄斧などがある。棺内に利器はなく、鏡と装身具で被葬者は囲まれていた。

石室と石棺の間で、墳丘主軸の方向に添った石室・石棺の長辺両側はほとんど相接して狭く、その小口両側では北側石棺周りの平縁部幅10.3cmに礫床幅30cmあり、南側の石棺平縁部幅約15cmに礫床幅約10cm前後ある。竪穴式石室の床面として北側の方が南側より大きく広めになっている。鉄器類も南側は刀子があるだけで、数も少ないのに、北側では刀子のほか刀や鉄斧などあり、数も多い。棺内北側に被葬者の頭部が置かれたことともかわりがある。

北側の礫床に30数本の刀子が主に棺壁に並行し、刃先を西へ向けていた。直刀が同じく並行し、柄頭を東に、折れた刃部を西へ向けていた。礫床の東北隅に3個の鉄斧が刃部を石室の東北隅へ向けてあった。また石棺の北側平縁部上に直刀が、礫床の直刀と同じく柄頭を東に、折

れた刃部を西へ向けていた。上記の直刀2本とも刃先は石棺の方、南へ向いていたが、散った刀子の中にも同じく刃先が石棺へ向いてあった。刀や刀子が切先を西へ向けていたのは丘陵西側の方へ平野がひらけていたこととかかわりがあるかもしれない。

石棺長辺の西側では、石棺北側平縁部上の北端から東側に直刀(刀1)、西側に長剣(剣1)がそれぞれ柄頭を北に、切先を南へ向けてあった。直刀の刃先は石棺の方、西へ向けていた。石棺両外側に石室北壁から2.6mほど先に、短剣がそれぞれ1本柄頭を北に切先を南に向け、また両外側南端で東側に短剣(剣3)、西側に直刀(刀4)がそれぞれ切先を南へ向けていた。西側の直刀は刃先を西へ向けてあった。上記の剣や刀の間には刀子が数本ずつあり、刀子も主に切先を南へ向けていた。この南へ向けていたのは被葬者の伸展葬の方向とかかわりがあるろう。

(1) 剣(第19図)

① 長 剣(剣1)

石棺西側平縁部上の北端におかれた長剣は、現存長1.18m、刃部は長さ1.09m、身幅4.2cm～4.8cm・厚さ1cm余ある。刃部の断面はレンズ状に近いけれど、鑄は明らかではない。全体に錆びて腐蝕したところもあるが、欠けたところはほとんどない。被葬者が女性であり、実際それを着装したかどうか、剣の長大さからみると、疑わしい。むしろ侍者が持って従ったか、普通は鄭重に安置された剣ではなかったかと思われる。権威の象徴であり、また神聖視された剣であつたらう。

木柄の残存長17.1cm、断面楕円形の木柄両端は比較的よく残り、外反した両端の長径4.3cm、その間は長径約2.5cmに腐蝕し、狭まる。木柄は刃部接着の所から約3cmでふたつに折れた。調査当初のときは、折れていなかったものである。折れた木柄の両側を見ると、露出した長さ約6.5cm・幅8mm・深さ2.5cmほどの溝になり、溝の間に茎が通り、木柄の先へ8mmほど突き出ている。木柄の先は垂直にとれており、茎の部分を覆う柄頭に何か外装がついていたに違いない。柄頭と柄元がともに柄間から反り上りをみせ残存しており、両者に木製かなか装具がついていたとみられる。柄頭の外装の長さは少なくとも1cm以上あるとみられ、向野田の長剣は推定全長1.20m前後とならう。

刃部にはところどころ布痕があり、木柄にこまかい糸目のようなあとが残る。木柄は腐蝕した所があるが、七分通り残存し、漆を塗ったか、薄膜のような残片がついている。木柄の茎に当る部分は茎を両側から挟むように削られ、径3mmの目釘孔がある。

剣の外装(こしらえ)は、柄木を合わせ、目釘をうち、木地のままか、糸で繁巻にして漆塗としたものが、前期には普通とあり、参考されよう。^④

なお、向野田の長剣は刃部にも鏽着した布痕がある。木鞘のあとはみられなかったが、もしあったとすれば、その残片は木柄と同じく腐蝕しても多少なり残つたらう。剣身は布帛に包まれていたとみられる。

② 短 剣 (剣2)

石棺西側平縁部で、中央よりやや南に1本ずつ短剣が並び、もう1本は棺外東側で南端近くおかれる。

棺外西側の短剣は、残存長36.3cm・刃部の長さ28.0cm・幅3.1cm~3.5cm・厚さ6mm~9mm、刃部断面はレンズ状を呈していて、鑄は明らかでない。刃部は両関とみえる。刃部と木柄の接合部は呑口形を残し、糸の繁巻きが部分的にあり、その裏にも糸巻の部分が残る。木柄は腐蝕して呑口式の柄縁から3.5cm辺で折れている。糸巻の残存した続きに漆を塗ったかと思われる所がある。糸巻きの糸は、目算で太さ1mm弱・幅5mmで6本、6mmで7本ほど数えられた。呑口に近い木柄の断面は楕円形の両側をすばめたような形で、長径3.5cm・幅1.5cm、茎の断面長さ1.9cm・幅5mmの長方形で、目釘孔が残る。

③ 短 剣 (剣3)

石棺東側平縁部の中央よりやや南の短剣は、残存長39.7cm・刃部の長さ33.6cm・身幅2.2cm~2.7cm・厚さ5mm~7mm。刃部に布痕が残る。刃部断面はレンズ状で、杏仁形の木柄断面長径の両端にほぼ接する。木柄と刃部の接着部は直線式で、長径の長さ2.8cm・幅1.2cm、繁巻の糸のあと幅1mmに3本くらい、黒色残り、漆のあとであろうか、石棺平面図で、腐蝕した木柄から北へ8cmほど離れ、残存長30cmほどの棒状の残欠がある。もしその短剣に続いたものとするれば、その短剣は剣ではなく、ヤリ先であったとみられる。4世紀にさかのぼるといふ奈良県桜井市メスリ山古墳では、鉄剣かヤリ先かとあつかわれた鉄剣状の利器が、のちに鉄製ヤリの刃部として記されているのが参考される。刃部と柄元の接着には、呑口式と直線式がある。向野田の場合も、短剣でなく、ヤリ先である可能性がある。1.20m前後の長剣があり、長槍であれば、儀礼としても威儀がそなえられるように思われる。

④ 短 剣 (剣4)

石棺東側平縁部の南端に残存長31cm、身幅3.3cm~3.7cm、厚さ約5mm、断面はレンズ状をなし、刃部に関らしい部分がみえる。茎の長さ5.5cm、幅1.8cmあり、目釘孔がすかしてみえる。茎の末端はほぼ直線的に残る。腐蝕した木柄残欠に糸の繁巻のあとがあり、刃部にもわずかな布痕が残る。

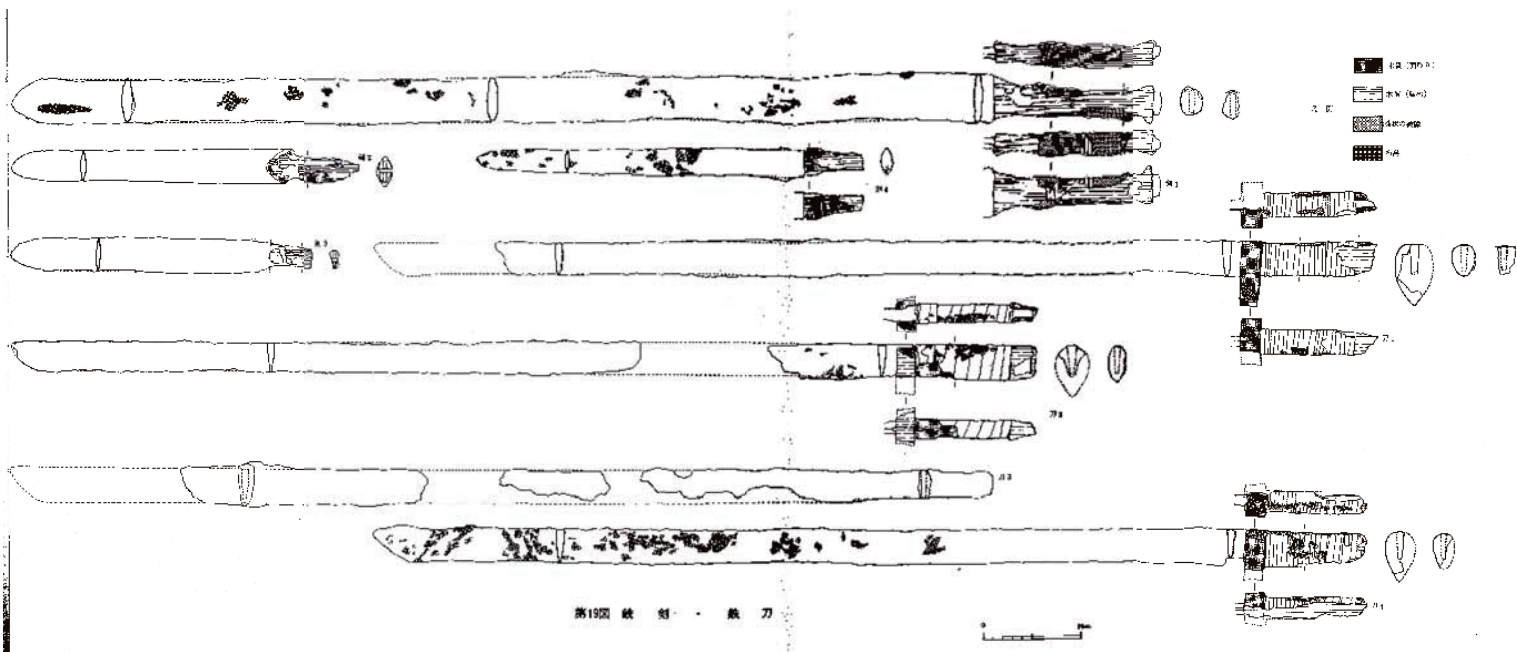
剣類の刃部も腐蝕し、小石などが付着するが、もとはすべて布帛で包まれていたものとみられる。

(2) 直 刀 (第19図)

① 直 刀 (刀1)

石棺東側平縁部上に、柄を北に刃部を南に向けてあった。

石棺平面図の推定残存長1.02mあり、切先を欠く。当初の実測で残存長72.6cm、刃部と柄は折れていた。刃部長さ59cm、棟幅8mm、身幅先の方で3.5cm、中ほどで3.2cm、関近くで3.7



第192图 铁刀 · 铁刀

cm、先の方が腐蝕変形していた。刃部断面はくさび形で、刃部はやや内反りする。刃先は石棺の方、西へ向けていた。

刃関から茎へかけ、やや中凹みの幅2cm、半かけの木質部がつき、とり上げると3個ほどに割れた。錆どめ補修したところ、木質部の断面は推定長径6.6cm・短径3.8cmとなり、柄の下の方へ長めに垂れ、驚いた。木質部に一部布痕がつく。

茎から身の棟までまっすぐな直刀で、木質部は茎を両側からはさむ形につき、柄木も同じく茎を中にし、木質部も柄木も茎の上面はそのままで柄部を平紐で柄頭の方から巻く。巻きかさねた紐ごとの外見上の幅4mm~6mmほどある。折れた柄元を見ると、茎との間が空になっていた。木柄の断面も倒卵形近く、木質部のわきで長径3.5cm・短径2.4cm、くさび形の茎は幅8mm・垂直の長さ2.8cmで先端がやや円味をおびる。茎はその先が一部露出する。

錆どめ補修した残存長89.8cm・刃部長さ76.2cm・茎長さ13.6cmあり、茎の長さは変わらない。

② 直 刀 (刀2)

石棺北側の平縁部上に、石棺北壁に添い、柄頭の方を東に切先を西へ向けていた。

当初の石棺平面図で、折れた刃部の間が13cm離れ、1個は長さ約58cm、他の柄のある1個は長さ22cmで、身幅3cm~3.5cm、棟幅約6mm、直刀①より身幅が狭く、やや内反する。

直刀①と同じ作りで、柄元で刃関と茎にかけて幅2cmの木質部の一部が残り、そのあとがある。

木柄に直刀①と同じく平紐が巻いてあり、また柄頭が欠けていた。

刃部2個の間、13cmの空白は欠損したものか、折れ、離れたものかどうか明らかでない。錆どめ補修した1個長さ63.9cm、他の柄のある1個長さ27.4cm、計長さ91.3cmとなる。

③ 直 刀 (刀3)

石棺北側の礎床のほぼ中央に、直刀1本が石棺と石室の短辺に並行した形であった。

柄は欠けるが、東にあったと見られ、切先は西へ向け、写真で見ると、先の方で折れ、またつづく。当初の石棺平面図では残存長約90cmあり、刃先は石棺の方、南へ向けていた。

錆どめ補修した刃部2個があり、1個は長さ50.8cm、身幅2.8cm・棟幅8mm、他の1個は25.3cm、身幅約3.4cm・棟幅9mmで、かなり腐蝕変形していた。2個はつながりがあり、計長さ76.1cmとなる。先の方で折れた刃部1個が不足する。

④ 直 刀 (刀4)

石棺西側平縁部上の南端に直刀1本があり、柄を北に切先を南に向けていた。刃先は西へ向けてあった。その平縁部北端の長剣とともにほぼ完形をなしている。

石棺平面図での長さ1.07cm。当初の実測で残存長1.01cm・刃部長さ86.8cm・茎長さ14.2cm・身幅3.1cm~3.6cm・棟幅約8mmある。刃部断面はくさび形で、刃部中ほどから先へやや内反りしたところがある。

刃関の深さ約 8 mm で、そこから長さ 2 cm ほど幅約 2.7 cm の茎が露出し、その続きに木質部がつく。木質部は幅 2 cm、長さ約 4 cm 残り、倒卵形近く、他の直刀のと作りは同じであろう。ただ刃関と木質部の間 2 cm の空白になにかあったか明らかでない。

木柄には平紐を巻いてあり、木質部に布痕が一部つく。木柄や木質部には漆かなにか塗ったとみられる。また木質部の上になにか被せてあったかどうか分からない。

錆どめ補修した直刀の長さ 1.01 m ある。

直刀の場合、柄は平紐巻であるのに対して剣の場合は糸の繁巻となっている。長剣にも糸を巻いたあとがあり、平紐巻ではないことが注意される。また直刀に折損の多いのは、或は実際に用いられたことの多かったことを示すものであろうか。

なお、突くという両刃の剣と切るという片刃の刀について、剣は刀とともに古墳時代前期に多く作られ、次第にその長さを増して刀に近づきながら、後期には主役を刀にゆずったという。向野田の場合、おそらく剣の長さも頂点近くに達し、やがて刀の多くなる前段階にあたるように思われる。

(3) 刀 子 (第20図～第23図)

向野田古墳の副葬品中、数の多い点で目立つのが刀子である。石棺外をとりまいて置かれた刀子は本数の少ない剣、刀に対応し、なにか補強するかのように散在していた。

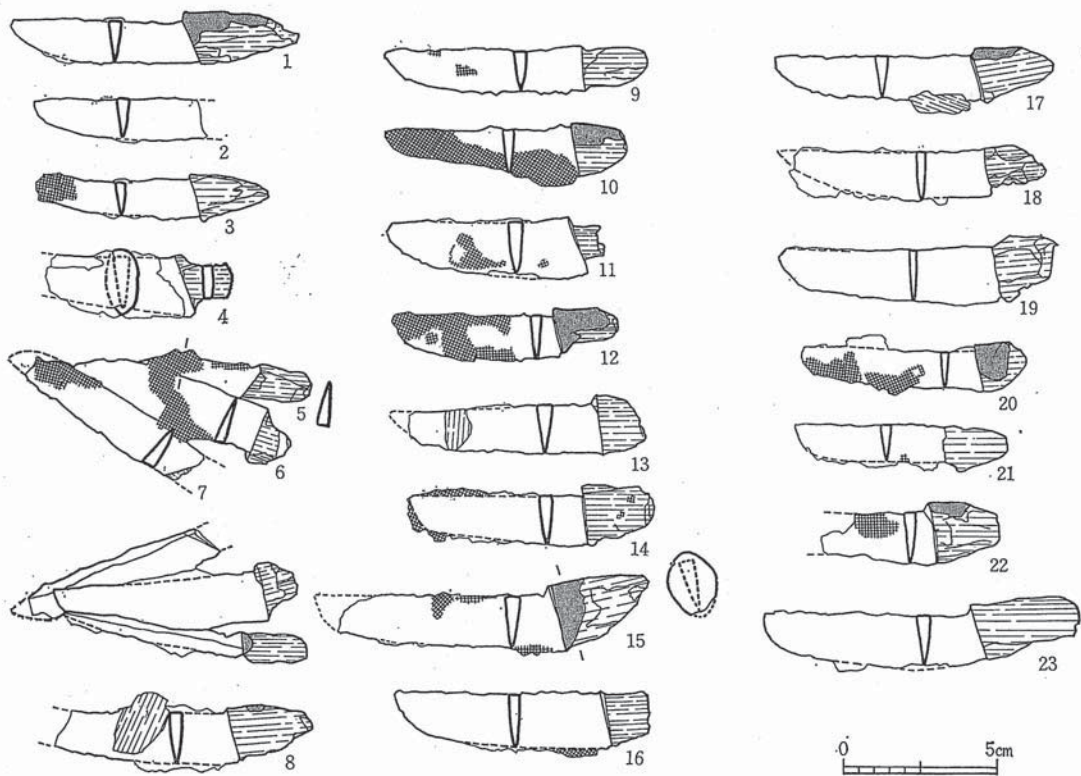
調査当初、やむなくとり上げた石棺外北側では37本を数えた。北側には折損した直刀などのほか東北隅に3個の鉄斧も置かれていた。北側に鉄器類の多いことは棺内被葬者の頭部が北側に安置されたこととかかわりがある。足部の先にあたる石棺外南側では刀子は7本を数えたにすぎなかった。その後の調査で石棺外東西両側の平縁部上に、東側で14本、西側で9本が測図され、その他直刀などに付着して見出されたものがある。現在78本を数える。

刀子は刃部の長さ 5 cm ～ 6 cm 余りのものが多く、長くて 10 cm 余りである。刃部断面はくさび形で、身幅約 1 cm ～ 1.7 cm、棟幅 2 mm ほどある。木柄が腐蝕してなくなり、露出した茎は長さ 1.5 cm ・ 幅 1 cm ・ 厚さ 2 mm ほどの長方形で、その断面も長方形をなしている。そして両関と刃関の2種類がある。

刃部と木柄の接着で、刃部の棟から柄元へやや斜めになったものが大部分で、垂直というか、まっすぐのものは3本ほどにすぎない。まっすぐ垂直に接着するものを仮に直線式というなら、斜めのものを斜線式とよんでおく。兵庫県朝来郡城の山古墳の小形刀子と似ている^②。大阪府富田林真名井古墳の刀子も柄口と刃部がやや斜角をなしている^③。

木柄の断面は倒ドンダリ形に近く、柄木は腐蝕しながらもほとんどの刀子に残存し、柄元の方に木質部の残るものが多い。

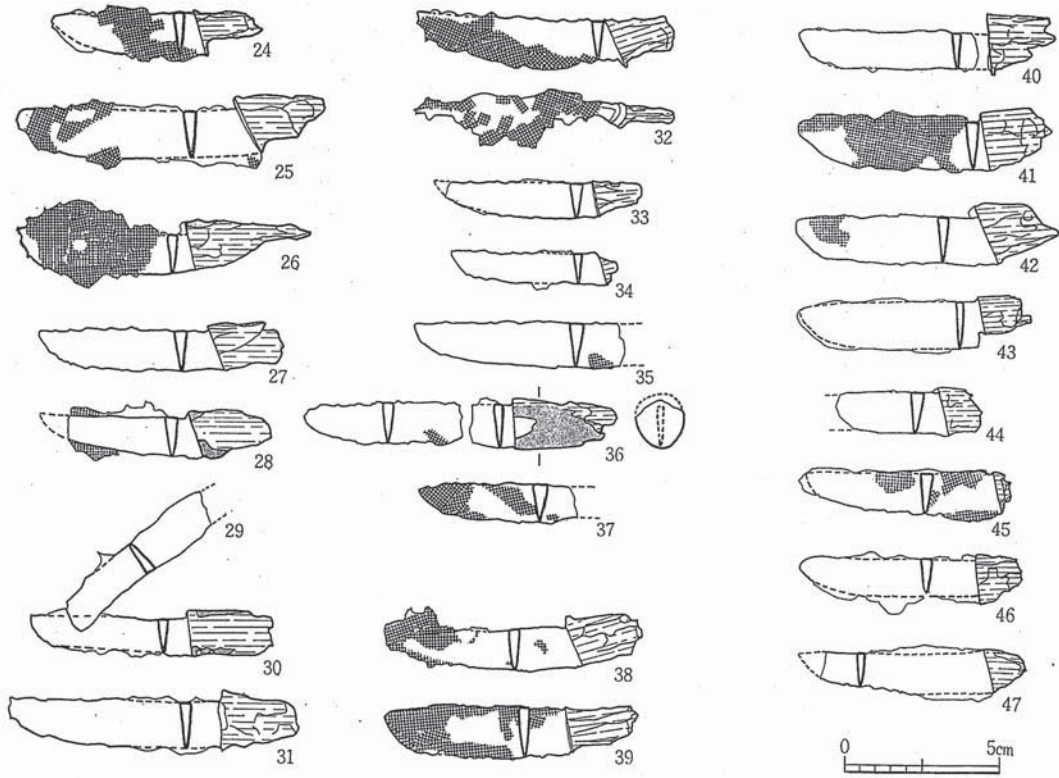
向野田の刀子には、すべてとってよいほど布痕がついていた。布痕は1枚～6枚重なるものがある。刀子を抜身のままなにかで包んだものとみられる。別表の通り、特にNでは重ね



第 20 圖

刀

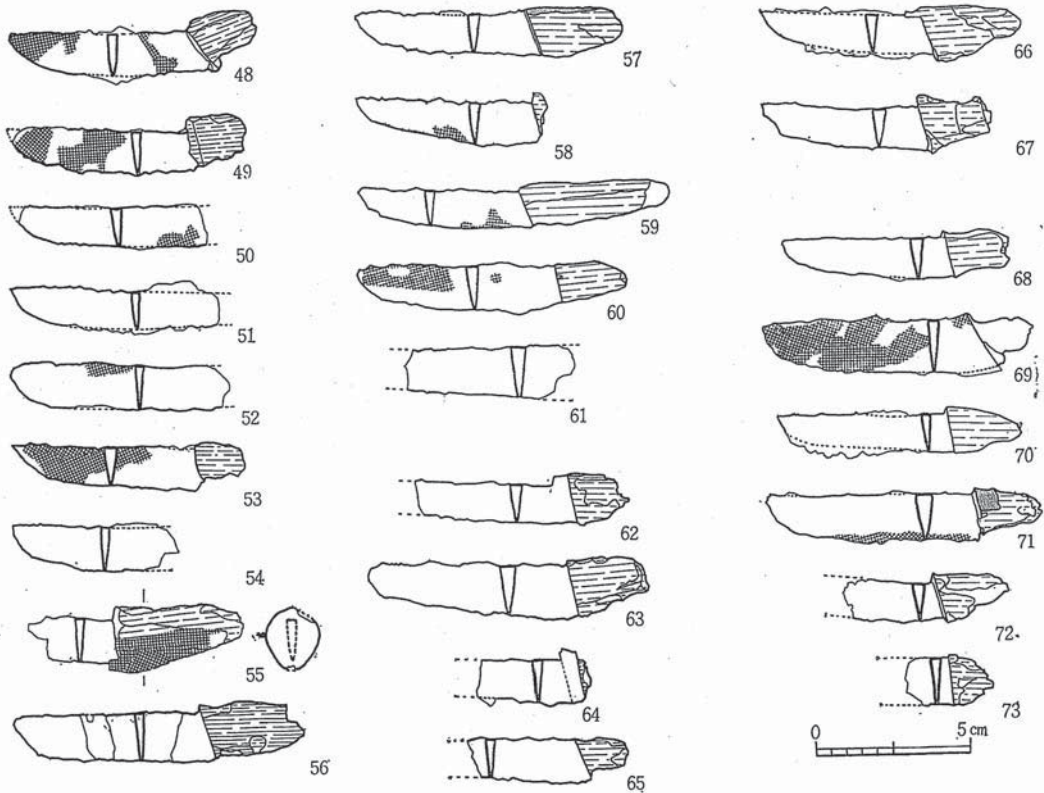
子 (1)



第 21 图

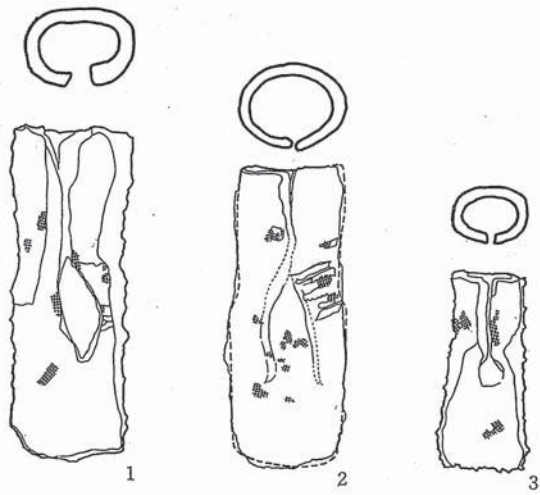
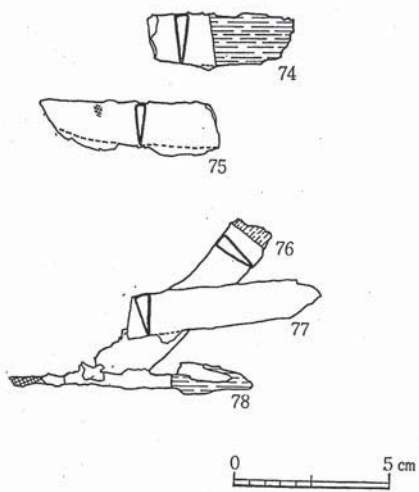
刀

子 (2)






第 22 图

刀 子 (3)



凡例

-  木質 (面取り)
-  木質 (腐朽)
-  布帛

第 23 図

刀 子 (4) ・ 鉄 斧

の枚数が目立って残存していた。腐蝕があったにしても、同じ場所のものなので、もし重ねの枚数のちがいがみとめられるとすれば、副葬時の鄭重さを示すものかもしれない。

城ノ山古墳の刀子にも布痕があった。城の山の1本は柄口部分に鉄製のうす板か漆の上に鉄錆が固着したようなあとがあり、また真名井では皮革様のもので作られたとみらる鞘の付着があった。向野田の1本にも木質でないなにか鞘状のものが付着していた。向野田古墳の竪穴式石室と石棺の間にあった78本の刀子は、数量の上からも注目される。剣・刀・刀子などの木質や布痕については専門家の鑑定を待ちたい。

第 8 表 刀子布痕の重ね枚数および繊維方向一覧表 (刀子78本)

重ね枚数	繊維方向														
	不明	1			2			3			4		5	6	
不明	不明	1	1	2	3	1	2	3	1	3	5	3	4	5	
本数	15	13	2	23	2	1	3	13	1	1	1	1	1	1	
計	15	13	27			17			2		1	3			

第 9 表 刀子出土個所別、布痕重ね枚数一覧表

重ね枚数	N(石室内、石棺外 北側)	W(石室内、石棺外 西側)	E(石室内、石棺外 東側)	S(石室内、石棺外 南側)	個所不明	計
不明	4	1	3	4	3	15
1	3	3	2	2	3	13
2	16	2	6	1	2	27
3	9	3	3	1	1	17
4	2					2
5		1				1
6	3					3
計	37	10	14	8	9	78

第 10 表

刀 子 計 測 表

単位 ㎜

図番号	出土個 所番号	現存長	刃部長	柄部長	身 幅	備 考
19-1	N 2	93.7	57.4	36.3	12.2	刃部に布帛 (4重・1方向)
19-2	N 4	56.3	56.3		13.5	
19-3	N 5	76.0	50.7	25.3	12.8	刃部に布帛 (2重・1方向) 2個所
19-4	N 6	60.3	42.6	17.7	16.8	刃部に鞘状のものが付着 (木質ではない)
19-5	N 7	82.3	59.4	22.9	16.9	刃部に布帛 (2重・2方向) 6・7と錆着
19-6	N 8	77.5	65.0	12.5	15.2	刃部に布帛 (2重・2方向) 5・7と錆着
19-7	N 9	95.9	57.9	38.0	14.5	刃部に布帛 (2重・2方向) 5・6と錆着
19-8	N10	84.5	57.3	27.2	16.0	刃部に布帛 (2重・3方向)
19-9	N11	85.5	63.2	22.3	12.7	刃部に布帛 (2重・2方向)
19-10	N12	78.3	60.0	18.3	14.0	刃部に布帛 (3重・1方向)
19-11	N13	70.0	61.0	9.0	15.8	刃部に布帛 (4重・3方向)
19-12	N14	72.7	51.7	21.0	14.0	刃部に布帛 (3重・3方向)
19-13	N15	77.0	60.1	16.9	15.6	刃部先端に布帛 (2重・2方向)
19-14	N16	79.8	56.7	23.1	15.8	刃部に布帛 (2重・2方向)
19-15	N17	100.8	67.0	33.8	15.4	刃部に布帛 (2重・2方向)
19-16	N19	82.1	66.1	16.0	16.8	刃部に布帛 (3重・3方向)
19-17	N20	90.2	63.6	26.6	14.0	刃部に布帛 (2重・2方向)
19-18	N21	83.4	63.6	19.8	13.8	刃部に布帛 (2重・2方向)
19-19	N22	89.8	69.5	20.3	17.2	柄部に布帛 (2重・2方向) 刃部に布帛 (2重・2方向)
19-20	N23	72.8	56.7	16.1	12.8	刃部に布帛 (2重・2方向)
19-21	N24	68.8	49.1	19.7	11.5	刃部に布帛 (3重・3方向)
19-22	N25	58.8	33.9	24.9	15.5	柄部から刃部にかけて布帛 (2重・2方向)
19-23	N26	103.0	68.0	35.0	14.4	刃部に布帛 (2重・1方向)

図番号	出土個 所番号	現存長	刃部長	柄部長	身幅	備考
20—24	N27	69.5	47.7	21.8	12.8	刃部に布帛(3重・3方向)
20—25	N28	100.5	71.3	29.2	16.3	刃部に布帛(6重・3方向)
20—26	N29	95.6	54.9	40.7	12.0	刃部に布帛(6重・4方向)
20—27	N30	79.3	55.9	23.4	12.8	
20—28	N31	67.7	39.5	28.2	12.2	刃部に布帛(3重・3方向)
20—29	N32	59.4	59.4		11.5	刃部に布帛(3重・2方向) 30と錆着
20—30	N33	79.3	51.1	28.2	11.2	刃部に布帛(3重・2方向) 29と錆着
20—31	N34	94.8	68.6	26.2	14.9	刃部に布帛(2重・2方向)
20—32	N35	84.3	62.2	22.1	12.8	刃部に布帛(6重・5方向)
20—33	N36	63.7	48.4	15.3	12.2	
20—34	N37	54.3	48.3	6.0	10.2	刃部に布帛(1重・1方向)
20—35	N38	67.9	67.9		13.3	刃部に布帛(1重・1方向)
20—36	N39	48.7 51.7	13.6 51.7	35.1	14.3 12.5	刃部に布帛(1重・1方向)
20—37	N40	52.3	52.3		11.7	刃部に布帛(3重・3方向)
20—38	W 1	83.6	59.6	24.0	13.0	刃部に布帛(5重・5方向)
20—39	W 2	81.8	59.1	22.7	13.5	刃部に布帛(3重・3方向)
20—40	W 3	78.8	55.4	23.4	12.1	刃部に布帛(1重・1方向)
20—41	W 4	82.3	59.3	23.0	12.6	刃部に布帛(2重・2方向)
20—42	W 5	85.0	57.3	27.7	14.2	刃部に布帛(2重・2方向)
20—43	W 6	75.5	58.8	16.7	15.3	刃部に布帛(1重・1方向)
20—44	W 7	47.0	33.8	13.2	12.0	刃部に布帛(1重・1方向)
20—45	W 8	68.5	63.3	5.2	12.7	刃部に布帛(3重・3方向)
20—46	W 9	71.6	57.6	14.0	12.0	刃部に布帛(3重・3方向)
20—47	W10	66.7	54.4	12.3	10.4	
21—48	E 1	79.5	58.5	21.0	12.2	刃部に布帛(3重・3方向)
21—49	E 2	76.7	59.9	16.8	12.2	刃部に布帛(2重・3方向)

図番号	出土個 所番号	現存長	刃部長	柄部長	身幅	備	考
21-50	E 3	61.6	61.6		12.4	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-51	E 4	69.4	69.4		12.0	刃部に布帛 (1重・1方向)	
21-52	E 5	71.4	71.4		12.7	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-53	E 6	75.0	57.8	17.2	11.2	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-54	E 7	54.7	54.7		14.4		
21-55	E 9	69.9	27.5	42.4	12.8	柄部に布帛 (3重・3方向)	
21-56	E10	94.8	60.9	33.4	15.0		
21-57	E11	87.0	55.8	31.2	11.8	刃部に布帛 (1重・1方向)	
21-58	E12	62.2	57.9	4.3	12.2	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-59	E13	101.9	53.2	48.7	11.2	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-60	E14	86.8	64.8	22.0	14.0	刃部に布帛 (3重・3方向)	
21-61	E15	54.6	48.4	6.2	15.4		
21-62	S 1	69.7	49.9	19.8	12.3		
21-63	S 2	90.9	65.9	25.0	16.3	刃部に布帛 (1重・1方向)	
21-64	S 3	36.7	33.0	3.7	13.7		
21-65	S 4	52.0	35.4	16.6	13.0		
21-66	S 7	85.0	53.3	31.7	12.5	刃部に布帛 (3重・3方向)	
21-67	S 8	74.5	51.2	23.3	12.4		
21-68	不明	74.5	53.6	20.9	12.6	刃部に布帛 (1重・1方向)	
21-69	〃	87.2	68.6	18.6	16.0	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-70	〃	78.5	55.3	23.2	10.3	刃部に布帛 (2重・2方向)	
21-71	〃	89.6	69.2	20.4	13.2	刃部に布帛 (3重・2方向)	
21-72	〃	53.1	28.9	24.2	11.6		
21-73	〃	28.4	12.8	15.6	14.2		
22-74	〃	48.5	20.3	28.2	15.3		
22-75	〃	70.0	64.2	5.8	13.8	刃部に布帛 (2重・2方向)	
22-76	〃	67.0	67.0		14.7	刃部に布帛 (1重・1方向) 77・78と錆着	
22-77	〃	80.0	55.2	24.8	11.9	刃部に布帛 (1重・1方向) 76・78と錆着	
22-78	〃	59.1	59.1		13.0	刃部に布帛 (1重・1方向) 76・77と錆着	

(4) 鉄 斧 (第23図)

石棺外、石室内東北隅に3個の鉄斧がハの字形に置かれていた。三本ともかなり腐蝕しているが、原形は有肩式ではなく、上部は両側から平たい楕円形に折り曲げられた袋状を呈し、斧頭の先は石斧の太形蛤刃に似ている。布痕がついていて、包まれていた形跡がみとめられる。

①

最大のもので長さ16.1cm・刃幅4.6cm・袋部の長径5.3cm(内径3.8cm)。柄のさし込み口から約4cm下方で、やや有肩式のような形を呈するが、明らかでない。また手にするとかなりの重さがある。

②

長さ14.8cm・刃幅4.9cm・袋部の長径5.3cm(内径3.9cm)。

③

長さ9.8cm・刃幅3.4cm・袋部の長径3.8cm(内径2.7cm)。

宇土周辺で、鉄斧の出土は宇土郡不知火町国越古墳の横穴式石室内奥屍床南側の別床内に鉄斧8個、錐形鉄斧3個が他の鉄製品とともに副葬されていた例がある。

向野田の場合、剣・刀・刀子のほか工具として鉄斧のみ副葬されている点に注意される。

(5) 不明遺物 (図版30-1)

石棺外、石棺東南隅の平縁部上に(第13図×印)なにか器物の残片とみられる長さ3.5cm・幅1mm~2mm、鍵形に曲った部分長さ8mm・幅5mm、もう1片は長さ1.5cm、曲った部分1cmの中空のもので、布帛に漆を塗ったようにもみえる。棺外は鉄器類ばかりであるけれど、鉄器に付属していたものかどうか明らかでない。(付論7参照)

(6) 鉄 鎌

向野田古墳前方部が削平された頃、前方部のほぼ長方形の高みのあった東辺から出土した。短冊形の鉄板の一端を折り曲げ、柄をはさんだ形のもので、長さ11.5cm・身幅約2cm・棟幅約2mm、普通内反りになるのが、切先の方へやや外反りになる。

6. 土 器 類

向野田古墳の場合、土器は縦穴式石室や石棺の内からはほとんど見出されなかった。

向野田の墳丘を確かめに登り、前方後円墳であることを現地検分した際、筆者らが前方部西北の一角で採集したわずかだが一括遺物とみられる土器片がある。

その後、墳形測量の頃、前方部前端ほぼ長方形の高み東南隅で葺石の間に壺形土器とみられる破片が見つかった。

さらにブルドーザーによる前方部削平のため行なった前方部西側の細長い残存墳丘発掘の

折、葦石の間に点々と埴輪片の存在がみとめられた。

ついで前方部が失われ、後円部を主とする調査では、後円部墳頂・後円部東斜面・西斜面や南斜面から土器片が出土し、埴輪片や壺形土器などの存在が確かめられた。東・西・南の3斜面へ入れたトレンチから出土した埴輪片は、墳丘の大きさからしては数少なく、埴輪の樹立が少なかったのではないかとと思われる。

(1) 現地検分した際の土器片

前方部西北の一角で、ブルドーザーの削った崖面から採集した土器小片が20片ほどある。その中にやや大形の破片が1個あり、タガ幅5.5cmの埴輪胴部のものもあった。この特殊な破片が埴輪に属することは、その後の発掘調査で同じくタガ幅の広いものがみつき、ほぼ間違いないことが明らかになった。採集後、問い合わせたことがあったが、このような例はないようであった。この報告作成中、偶然のことからこの破片が機縁となり、埴輪研究の進んでいることを知ることができた。この破片は黄褐色の間に黒斑が大半を占め、器壁は堅く、タガの両側端の上方片側はヘラ状工具でおさえ削り、そのためタガ上面に細長く低めにはみだし、下方片側も同じく上面にはみだしている。タガの上方胴部は幅約3.8cmの板の小口でやや斜めのタテハケを左から右へ少しずつ重ねてつけ、その上にまたナメハケがつき、タガ上方はユビで強くおさえ、指紋のような線が残り、タガと胴部の接合部はヘラ状工具でヨコナデしたようなところがある。タガ下方の接合部はユビナデとみられる。タガの中央はやや高まり、タガ裏面の器壁をおさえ、なでたためであろう。タガ下方胴部にも同じくタテハケがわずかつく。この破片には縦3.3cm・横9mmの方形スカシが残り、当初気がつかなかった。スカシの面は削り、磨きがかかり、縦辺の下端に長さ5mm・幅0.5mmほどの切先のあとがある。スカシ器壁の厚さ約1.3cm。この破片の裏面は淡赤褐色、地肌は荒れて細かい砂粒や砂粒あとの孔が目立つ。ナデ・オサエ・縦にユビナデした形跡がうかがわれる。

口縁片の中、長さ7.7cmと約14cmの2個はその後の調査から朝顔形の二重口縁のものではないかと思われ、長さ6.2cm・口縁の長さ約2cmのものは縦約4.5cm・横5.6cmの破片と同一個体の二重口縁をなすものではないかと思われ、ともに同じ胎土・焼成の黄褐色で、赤色顔料がつき、約2cmの口縁片にはやや斜めのタテハケにヨコハケがつく。口縁上面は黒色の地肌である。

埴輪片か疑問であるが、縦約5.7cm・横9.6cmの肩部とみられる破片がある。タテハケにナメハケがかすか、その上に4本の重弧文状の沈線がつく。このような破片はこの1個だけで、その後の調査でもみられなかった。外面に赤色顔料がかすかにつく。

二重口縁頸部が肩部につづく頸部下端につく長さ7.2cm・幅2cm、内彎し上向き、先端円味のある突帯片がある。下面に赤色顔料がつく。頸部に接合する部分はいく字形を呈し、タテハケの痕跡が残る。接合した時、突帯の幅1.7cmとなり、先端辺で厚さ5mm。

縦4.1 cm・横6.7 cmの三角形突帯のついた破片がある。器壁の厚さ約1 cm、淡黄褐色で、地肌は荒れる。このような突帯の破片は、その後の調査で見あたらない。

(2) 埴輪

ブルドーザーが前方部前端の高さ約3 mの長方形の高みを削り、ほぼ前方部を削平し、墳丘西側が細長く残存していた。その状況に驚き、緊急調査した際、前方部西側墳丘の段築二段目とみられる斜面からくびれ部の方へかけ、AからGまで区域を分けて調べた葺石は断続したところもあったが、長さ約16 mにわたり、幅1 m～1.5 mくらい帯状に続いていた。その間に埴輪片とみられるものが点々と散在していた。破片がグループをなしたところも数個所みられ、或いはそれが本来の埴輪樹立の位置であったかもしれない。その心々間の距離は1 m～1.3 mをはかる。葺石は長さ10 cm前後、幅7 cm前後の自然石で、河原石のような丸味を帯びたものもあり、山石を割ったようなものもある。

後円部の墳丘斜面におけるⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵの5個所のトレンチから葺石や埴輪片の出土が確かめられた。いずれも余り良好な出土状態ではなく、散乱した形を呈していた。

後円部墳頂平坦部の墓壇東側で葺石がほぼ半環状をなして出土した。その中から葺石と埴輪の基部の破片と重なり見出された。墳頂に葺石がしかれ、埴輪円筒の立っていたことが想像される。

埴輪片の整理進行中に、方形や三角形のスキャン孔とみられるものが見出された。方形の一辺の残存長16 cmのものもあるのに驚いた。

墳丘をめぐる埴輪片の所在については墳丘の変容があり、また発掘が局部的であったこともあって、埴輪の原初的な姿を明らかにできなかった。

向野田の前方後円墳発見当初、前方部前端西北角西側で採取した埴輪片とみられるものが異常な幅の広いタガをなしていた。埴輪円筒は普通タガは狭いものが多いのに対し、向野田の例は幅が広く、タガはさまざまな大きさを示している。別表の通り、タガの幅の広さ3.3 cm～8.8 cmまでである。このような例は、今のところ、他にみられないようである。

向野田の場合、埴輪の完形品の出土がなく、墳丘の大きさにくらべ土器片の数はそう多くなく、また復原に足る土器片もない。葺石の間にあり、また朝顔形口縁片・頸部片・胴部片や基部片などもあって、埴輪の残欠であることは間違いのないように思われる。

① 埴輪口縁部片

口縁部を上半・下半と分けたけれど、それぞれ上半に下半、下半に上半が部分的につく。上半・下半をかなり残したものはわずか1個にすぎない(第24図2)。別表の通り、A・B2種類の形式がみられる。

A類……く字形の反りがある。6個ある。そのうち1個は上半・下半をよく残し、口縁が外反し、口縁端面はケズリで平らとなり、上半・下半接合部に同じ口縁端面がめぐる。接合部の

口縁端面は、退化というか消えていくようである。外面にタテハケ、内面にヨコハケがある。

B類……く字形が外反の傾向を示すのと異なり、逆にやや内反りの形をとるものがある。4個ある。口縁端面は内面がまるくなり、また内外両面とも円味をおびるかと思われる。さらに上半・下半接合部で低い側高で段状となり下半へつづくもの、また段状の側面がへこみ、内彎してゆくものなどがある。外面にナナメハケ、内面にヨコハケがある。

別表の通り、向野田の場合、出土した埴輪口縁部片は二重口縁とみられる朝顔形のみであり、円筒埴輪の口縁片として直立するものはなかった。古式古墳の埴輪には口縁のひらく例があり、向野田の場合もあるいはB類としたものが口縁のひらく円筒埴輪をなす可能性があり、疑問が残る。

② 埴輪頸部片

朝顔形円筒埴輪の頸部片とみられるものが2個ある。そのうち1個は内外両側面が淡赤褐色、頸部は直立し、残存高10.6cm、下端近く内彎し、上向きの突帯がめぐる。復原径17.8cm、外面のタテハケ、ナナメハケはナデで消え、なめらか、裏面はヨコハケにナデ。上端外反の部分ヨコハケ、下端底面の部分はナデ。後円部墳頂すぐ下方東斜面から出土した(第24図10)。頸部のほぼ同じ突帯片が前方部西北角西側から出土している。この直立した頸部片と似た頸部の破片が1個ある。同一個体が明らかでない。こうした突帯は松橋町前田遺跡の顔顔形円筒埴輪^⑧にもつくけれど、端面は垂直に近く、向野田のそれと異なる。

なお1個は口縁につづく頸部も欠け、大きさ縦約6cm・横13.5cm・厚さ約1cm、頸部の復原径13.2cm内外両面とも淡黄褐色、外面は地肌がかなり荒れ、砂粒が目立ち、器面調整は不明、内面はナデ。口縁上半へつづくふくらみから、二重口縁とみられるが、器形が明らかでない。

他の1個は、薄手で内外両側面は淡黄褐色、上方は欠け、下方肩部へつづく。外面頸部と肩部の接合部に突帯があったか、灰色の帯状のあとがめぐる。裏面はヨコハケ・ナナメハケ、下方肩部へナナメハケがつく。この頸部の突帯は、前方部西北角西側出土の三角形突帯に似たものかもしれない。この頸部片は、復原径16.9cm、口縁のひらく壺形土器で、壺形埴輪として決め手を欠く^⑨。

③ 埴輪肩部片

埴輪肩部片とみられるものが2個ある。1個はやや厚手・円弧状で、上辺でやや反り・上端の厚さ約9mm、タテハケにナナメハケ、ハケメはナデでほとんど消える。上下両端に1・2本ヨコハケがつく。裏面はナデ。もう1個はやや薄手、円弧状で、裏面はナナメハケにナデ、2個も縦のスカシがつき、縦の割れかたが短い。

土器肩部片が5個ある。埴輪のものかどうか、明らかでないが、参考例としてあげておく。重弧文状の4本の刻みがタテハケの上につき、ハケメはナデで消える。

④ 埴輪タガ片

向野田古墳の埴輪タガ片が、これまで例を見ないものであることは前述した。現在17個のタガ片があり、別表の通りタガの器面調整から分類した。

A類……タガ上面にハケメがなく、ヨコナデのもの。4個のうち3個は同一個体に属するものとみられ、その1個はタガ上下両方にスカシが残る。上方は縦・横わずか、下方は縦13cm・横1.7cm方形スカシで、長方形と思われる。タガの裏面はナデ。

B類……タガ上面はヨコハケで、2個ある。内外両面2個ともそれぞれ地肌の荒れかたはちがうが、タガの作りは似ている。同一個体か、または工人が同じであったか。スカシがつく。

C類……タガ上面がヨコハケにナナメハケのかかるもの。1個ある。A・B両類とくらべ、タガ幅7.5cm・突出長3mmでひらたい。裏面はナデ。小片で、上面は黒斑が占める。

D類……タガ上面にナナメハケにナナメハケで、格子状になるもの。3個ある。そのうち2個はタガの作り、ハケメの残存状態が同じで、両者の裏面ハケメや色調なども似ている。同一個体か、または工人が同じであったか。他の1個は交叉するナナメハケの幅が同じく広く、ハケメの線の幅も広く、黒斑が占める。3個とも裏面にハケメがつく。スカシがつく。

E類……タガ上面に太めのタタキがつくもの。格子状ナナメタタキのもの、ヨコやナナメタタキのものなどを一括した。6個ある。方形・三角形スカシのつくものもある。

F類……タガ上面はナデ・オサエで、下方側端は調整がないもの。1個ある。スカシがつく。

⑤ 埴輪胴部片

胴部片が12個ある。タテハケの明らかなものが4個ある。そのうち2個は黒斑があり、外見上似ているけれど、裏面のハケメやナデが異なる。他の2個はハケメの幅が広く、似ているが、こうしたタテハケは向野田の場合、他にみられない。最近筆者の発見した不知火町塚原平古墳にもこの幅広いハケメの例がある。また赤褐色のナナメハケの2個は、外見上やや似ているが、内面がハケメとナデで別個体である。黄褐色の一見複雑なハケメの破片は、スカシの一边16cmあり、タガ間の長さに近いものであろう。胴部辺ではスカシのつくものが5個あり、その割れかたは主に水平で、円筒の作り、輪積みか巻き上げとのかかわりが察せられる。またスカシの大きいことは円筒の大きさを示唆するものではないかと思われる。

⑥ 埴輪基部片

埴輪基部片とみられるものが4個ある。それぞれ底部へかけ、やや異なる。そのうち、最大の破片は、後円部墳頂で墓域東側の葺石の間にあったもので、残存高約19cm・復原径34.7cmある。内外両側とも明淡赤褐色で、白みがる。主に外面はタテハケ、裏面はヨコハケで、器壁の厚さは約1cm、薄手にみえる。底部から逆Y字状に立ちあがる。後円部南斜面のトレンチ出土のタガ幅8.8cmの破片は、この基部片と同一個体のものではないかとみられる。墳頂平坦部に埴輪方形配列があったかどうかは明らかでないが、墳頂部に埴輪の樹丘があったことが知られる。埴輪片の残存の少ないことから、向野田の場合、方形配列としても埴輪の数は多くは

なかったと思われる。

(3) 埴輪の整理から

タガについて、すぐ思いつくのは弥生式甕棺の突帯である。それについては先学が指摘されている^⑧。北九州で甕棺の突帯がやや幅広く、低いもののあることをみたこともある。また鹿児島県成川遺跡出土のものに低めで幅広い突帯がつくという。向野田の場合、タガ幅の広いことは異常といってよいであろう。先学にしばしば尋ねたが、今もって謎で、将来の課題といわなくてはならない。今いえることは、タガ幅やタガ上面調整がまちまちで、まだ定型化していないことが注意される。それは向野田の埴輪の各部についてもみられる。さして出土の数も多くないのに、さまざまな形がみられることは、なにか理由がなくてはならない。埴輪工人が集団をなしていたとすれば、そこに或る製作技術が伝えられるか、または創られるかしていたのではないかと思われる。工人は集団ではなく、別々であったことも考えられる。また別々であったとしても、ひとついえることはタガ幅の違いはあっても、共通して概してタガ幅の広いことであろう。これまでのところ、他所に見出されないとすれば、工人は別々であったとしても、向野田古墳被葬者の支配圏ではタガ幅の広いものが用いられたのであろうか。広形化するということは、土器ではないが、銅剣銅鉾などの場合にあり、参考される。タガの幅が広ければ円筒の側面が補強されるかもしれない。また幅の狭いものと違い、装飾化に役立つかもしれない。しかしまた変わった意味があるかもしれない。

はじめ埴輪片のうち、タガの幅広いことに関心を持っていたが、整理が進む段階で部分的であるけれど、スカン孔のつくものがあることも分かった。タガの幅の広いことから、これまで筆者らが復原したことのある宇土郡不知火町国越古墳や八代郡竜北町姫ノ城古墳などの円筒埴輪とは系統が異なるものかもしれない^⑨。隣の松橋町大塚古墳近くの前田遺跡出土の朝顔形円筒埴輪の例があるけれど、それともタガがちがっている。

埴輪円筒につくスカン孔に方形・三角形をとるとみられるものがある。方形ではL字形のもの、三角形では逆V字形また胴部側面の在りかたから三角形の一辺と推定されるものなどがあり、方形は長方形と思われる。松橋前田遺跡は筆者も発掘現場を実見したが、円形のほか三角形のあることを知った^⑩。主に九州外の例で、分けられた円筒埴輪編年の図によると、長方形・三角形のスカン孔は古墳前期から中期へかけみられるようである^⑪。

向野田の埴輪片で気のつくことは、外面に黒斑が多いことであった。不知火町国越古墳の埴輪片は未整理であるけれど黒斑はないようである。また最近筆者の発見した不知火町塚原平古墳の埴輪円筒片も、黒斑はなく、須恵質の破片がみとめられる。黒斑の有無は焼成法の違いによることが指摘されている。向野田の場合、野焼きであったことが知られる。また埴輪片には赤色顔料が残り、赤色が塗られていたことが分かる。

後円部墳頂平坦部で墓壙東側の残存葺石の間に出土した埴輪基部は1個ではあるけれど、向

野田の埴輪片中、最大のものであった。墳頂部における埴輪の樹立があったことを示すものとして興味がある。ただ墳頂部で埴輪方形配列を見出すことができなかったことが惜しまれる。

校正中、川西宏幸氏から次のご教示をいただいた。

「向野田の円筒埴輪につきましては、弥生式土器のタタキ技法の伝統を遺存させている点で、在地色の強さに驚かされました。同時期の畿内の円筒埴輪製作上の約束を忠実に模倣していないと思います。

ところが有佐大塚古墳の円筒埴輪は、向野田のものと隔たらない時期だと思われませんが、拝見させていただいた限り、畿内色が感じられます。」と記されている。

埴輪のタガについてはご所見が述べられていなかった。有佐大塚古墳の墳丘上に埴輪円筒の基部が原位置に所在したことは、筆者が報告したことがある。最近、この古墳の石室残欠の確認調査を、同地永松豊蔵文化財専門委員長とともに行ない、確かめることができた。また高木恭二氏の知らせにより、永松氏所蔵の有佐大塚古墳出土埴輪にタガの端面幅7mmの狭く、色調のくすむものと口縁部で端面の厚さ1.5cmと広く、淡黄褐色のものなど2種類のあることを確かめた。二種類がそれぞれ二時期にわたるらしく、注意される。

埴輪について、次の報文は高木恭二氏による。

熊本県内における埴輪について、これまで概括的に述べたものはなく、わずかに伊藤奎二氏によって県内の埴輪の地名表・集成図が作成され、そのほかには個別の古墳に報告された資料があるのみである。菊水町清原台地の報告は、京塚・船山・塚坊主・虚空蔵塚の各古墳についてなされ、単一小地域におけるこのような報告は今後に望まれる有効的な方法であろう。

ところで熊本県内における初期の埴輪については、わずかに底部穿孔を有するいわゆる壺形埴輪について、八代郡高塚東原遺跡・宇土郡弁天山古墳・玉名郡院塚古墳・阿蘇郡長目塚古墳などの例について報告されているのみで、円筒埴輪（朝顔形埴輪を含む）でこれらの時期に属するとする確実な例は知られていなかった。向野田古墳では確実に円筒埴輪と考えられるような直立する口縁部はみられず、朝顔形埴輪のみが樹立されていた可能性もある。ちなみに巻末第19表熊本県内埴輪地名表にみるように肥後における朝顔形埴輪の出土例を瞥見すると、玉名郡稻荷山古墳・同船山古墳・同塚坊主古墳・山鹿市臼塚古墳・同金屋塚古墳・鹿本郡高熊古墳・下益城郡琵琶塚古墳・同前田A地点・同松橋大塚古墳・宇土郡鴨籠東古墳・同国越古墳・八代郡姫ノ城古墳・八代市大塚古墳などがあげられる。

前田・琵琶塚出土の朝顔形埴輪は円形のほかに三角形・方形のスカシがみられ、特に前田の朝顔形の肩部に三角形のスカシを有する例を指摘されているが、琵琶塚にも同様のスカシを有し、円筒埴輪ではないが長目塚古墳の例もこれらに通じるものであろう。なお前田の埴輪には方形・三角形スカシなどに古い伝統を残すものの時期的には下降するものであろう。

宇土地方の古墳で壺形埴輪も含めて、埴輪の存在が確認されているのは宇土市スリバチ山・

同迫の上・同神合・同向野田・不知火町弁天山・同国越・同道免・同鴨籠東・同塚原平・松橋町大塚などの古墳である。また古墳ではないが宇土市轟貝塚・同西岡台遺跡・松橋町前田遺跡（A地点）などからも出土しており、前田A地点は松橋大塚古墳から南へ約100mはなれたところにあり、古墳に樹立されたような状態ではなく、朝顔形・円筒埴輪が20本近く雑然と出土しており、報告がなく、その詳細や性格について明確にされたものはない。ただ窯あるいはそれともなう工房などの可能性を指摘されたことがある^⑩。すぐ近くに存する大塚古墳に埴輪を有することが明らかにできたので、それとの関連が重要なポイントとなろう。

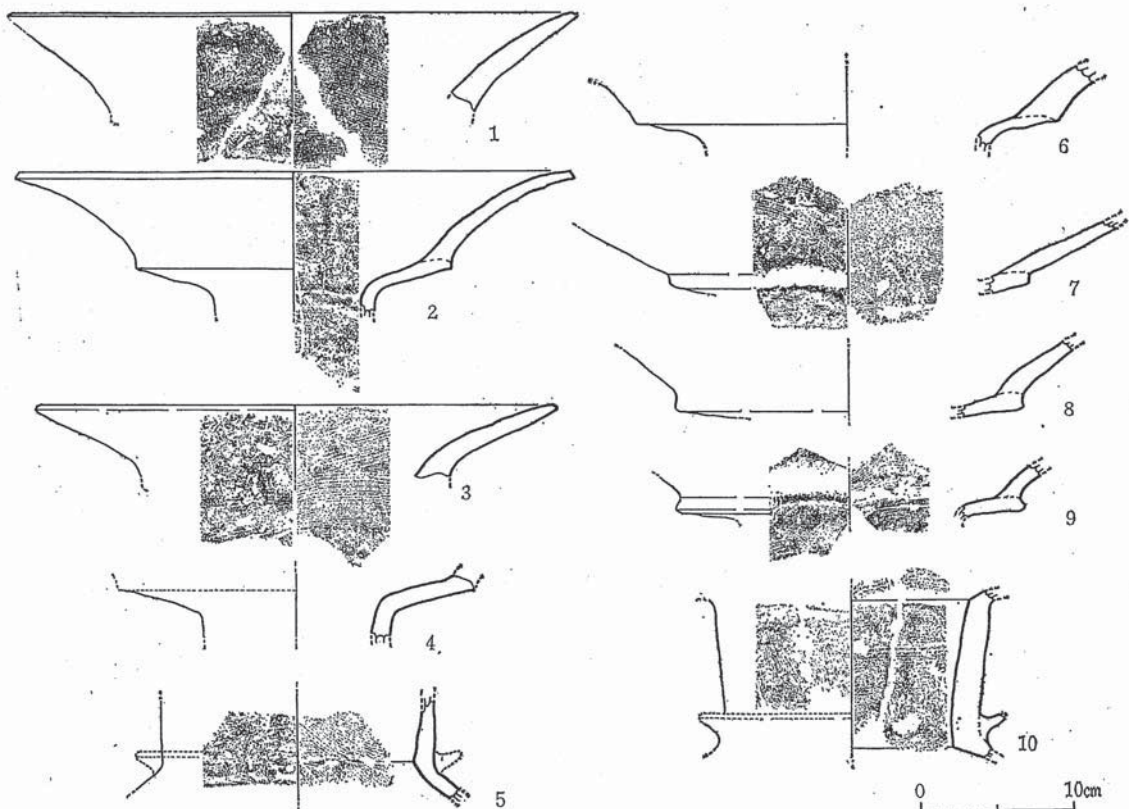
スリバチ山・迫ノ上・弁天山の各古墳から出土しているのは底部に穿孔のある壺形埴輪であり、向野田古墳の時期にいたってはじめて円筒系埴輪が導入されたことになる。

向野田古墳の埴輪については既に述べているように種々の点で特殊なあり方を示している。すなわち、タガの幅は3.3～8.8cmと異常に広く、その上をタタキ目や格子目状のハケ目が施され、スカンは長方形か三角形であり、円形はみられない。しかもその大きさは長方形で最高15.5cm、三角形で最高11.5cmをはかり、かなり大きく、古い埴輪に共通する点であろう。しかし全体をうかがい知るような埴輪はみられず、その高さがどれくらいになり、タガが何段施され、スカンがどのような位置にいくつあったかなど不明な点が多い。黒斑を有し、底径では約34cmをはかる。タガ上にはないが外面調整に須恵器と同様の叩きをほどこす大阪淡輪^⑪・和歌山大谷^⑫・宮崎下北方^⑬などにみられ、向野田の叩きはこれらとは異なり弥生式土器の系譜につながる叩き技法^⑭であることが考えられ、地方色がつよく感じられるが、管見によれば類例はない。

九州における円筒埴輪出現後の埴輪変遷を高橋氏は6期に分けられ^⑮、そのI期を「円筒埴輪は比較的小型で器壁も薄い。タガは幅狭くかつ外へ突出する。外面は縦あるいは斜行の刷毛目が施される。……一般に胎土は良質で、黒斑も認められる。この時期は埴輪はまだ普及せず、特定の大型前方後円墳にわずかに採用されたにすぎない。」と述べられ、4世紀末葉から5世紀前半に比定されている。

向野田の埴輪のタガやタガ上の調整など、他に例をみずこの編年にそのまま適用できるとは思われないが、タテハケ目が施され比較的薄い器壁で黒斑を有し、スカンなどに共通した面をもっていることが知られ、I期にあげられた佐賀空路寺古墳^⑯などでも朝顔形埴輪がしられている。なお同谷口古墳^⑰・福岡老司古墳^⑱などは年代的にも近い時期が考えられ、向野田は九州の埴輪編年では同氏のI期に比定できるものと考えられる^⑲。

このほか肥後における円筒埴輪で窰窯を用いる以前の、いわゆる野焼きと考えられる黒斑を有するものは八代郡有佐大塚古墳^⑳・下益城郡琵琶塚古墳^㉑・鹿本郡岩原狐塚古墳^㉒などであり、同じく岩原双子塚古墳もその可能性が考えられる。



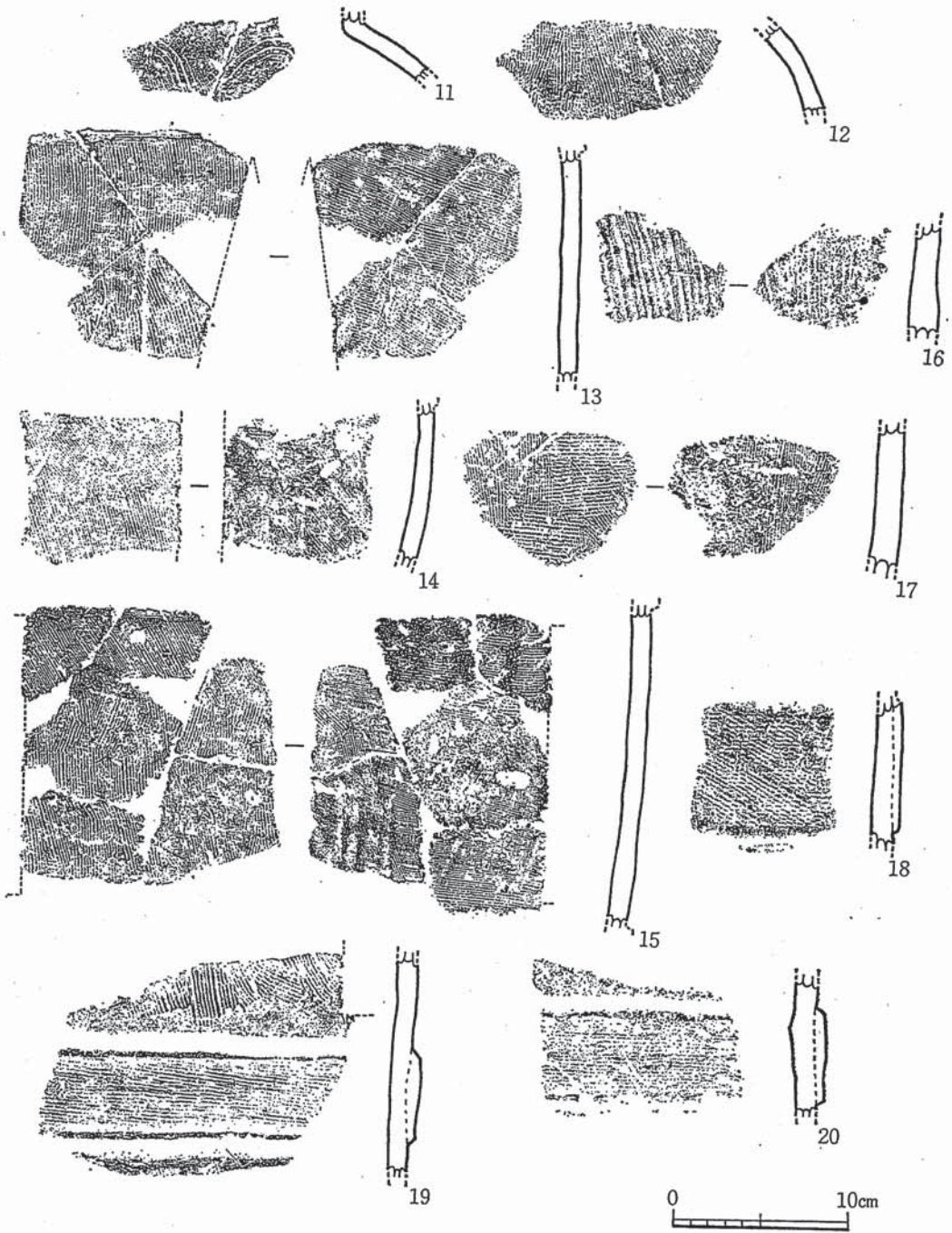
第 24 圖

壺

輪

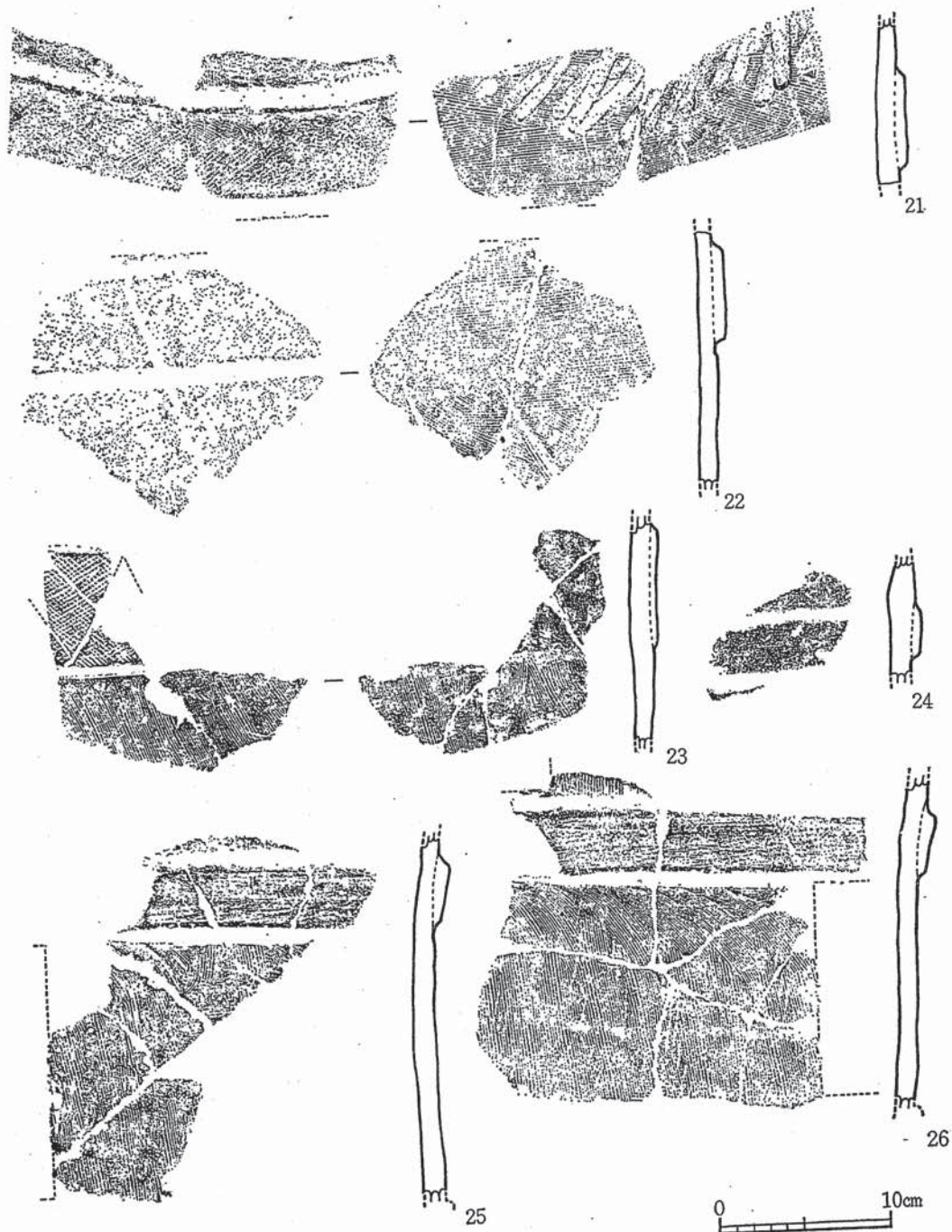
(1)

0 5 10cm



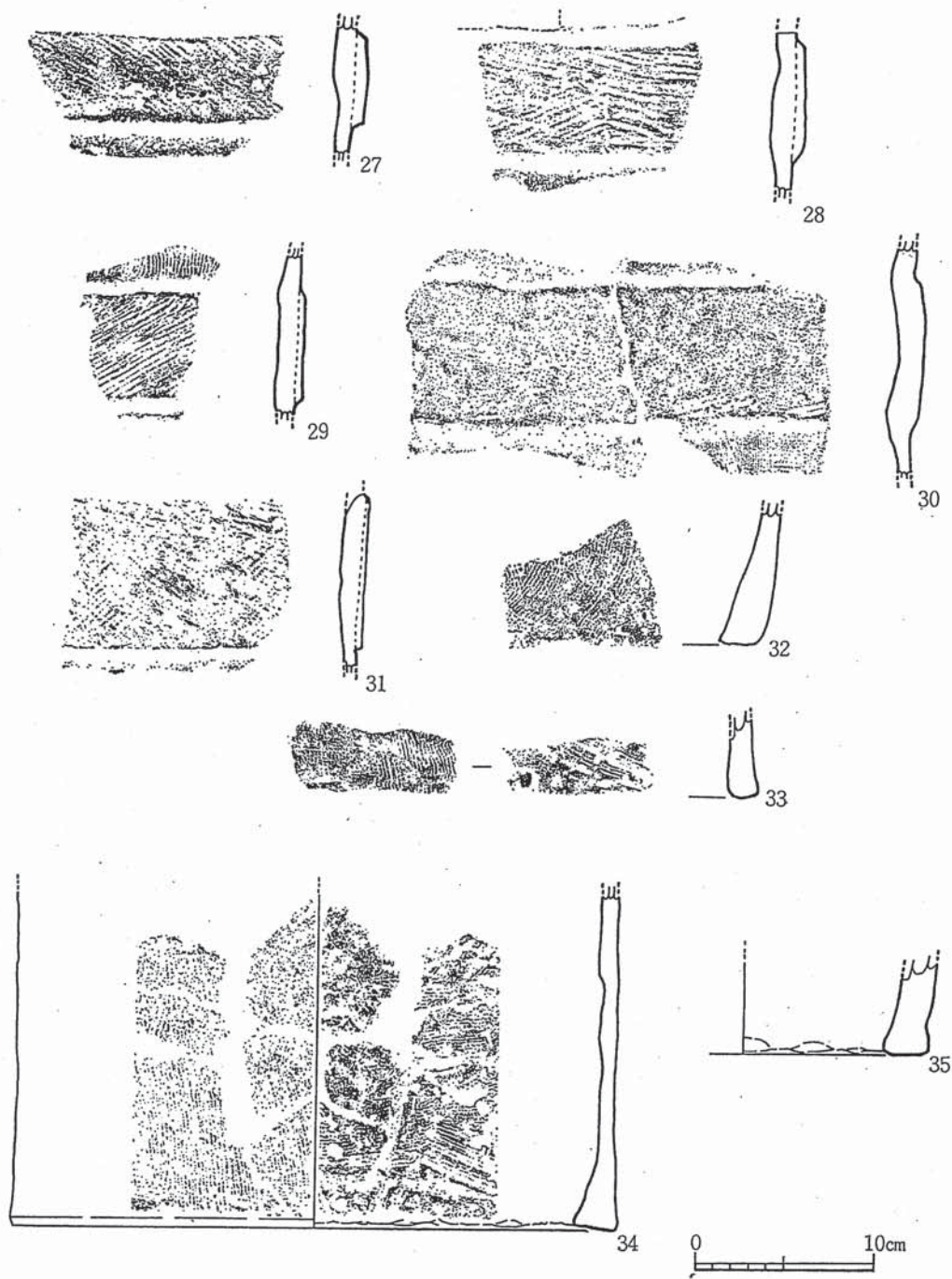
第 25 圖

埴 輪 (2)



第 26 图

埴 輪 (3)



第 27 圖

埴 輪 (4)

(3) 壺形土器

① 前方部出土の壺形土器 (第28図3・4)

墳形実測後間もなく前方部のほぼ長方形の高み東南隅で、葺石の間から破砕した土器片が一部露出しているのを見つけて、採取した。これまであまり見かけたことのない淡紫褐色で、やや薄手にみえる焼成良好のもので20数個の破片となっていた。口縁は接合部で欠け、頸部は立ち上り高さ約2.5cmあり、外面タテハケにヨコナデ、裏面はナデ。完形ではないが、胴部片は半分近く残り、大きさ縦最大長41.5cm・横最大幅29.3cmある。外面はナナメハケ(2cm幅につき12本、右上→左下)に左から右へナナメハケがやや重なり、胴部中央から下方へタテハケ近くなり、下方でナナメハケがつく。タタキがある。裏面も淡紫褐色で、タテハケ(2cm幅につき16本)が一貫してつき、下方でナナメハケがある。タテナデがある。器壁の厚さは6mm~9mm。内外両面に石英粉や雲母微粉とみえるものを含む。

丸底の壺形土器とみられ、おそらく供献されたものであろう。確實ではないが、口縁部を含め推定高さ45cm前後・頸部復原径13.2cm・胴部中央復原径33.6cmある。なお外面下方に縦約12cm・横約14cmの黒斑があり、裏面にはみられない。この現象は向野田の埴輪と似たところがあり、焼成法も同じものであろうか。土師器としても注目される。

② 後円部出土の壺形土器 (第28図2)

後円部墳頂から南斜面に入れたⅡトレンチでコンターのー5m辺で上部の欠けた壺形とみられる土器1個が土中に直立した形で発掘された。その付近には葺石や埴輪片もわずかながら出土した。

この丸底の土器残欠は、残存高約22cm・胴径約23cm・器壁の厚さ4mm~9mm、色は淡黄褐色。表面はなめらかだが地肌が荒れ、器壁調整は裏面の凹凸が目立ち、縦方向のへら削りである。裏面の地肌も荒れる。器壁に雲母微粉とみられるものがまじる。

おそらく壺形土師器として据えられた形で意識的に地山へ一部掘り込んでいた形跡がある。土器底部に穿孔はない。発掘当時、この土器と同じ土器の出土を期待したけれど、この1個だけであった。この1例では壺形埴輪ということに決め手を欠く。墳丘主軸線の通る付近にあることが注意される。

調査当時、実測図に記入された次の報文は石橋新次氏による。

ハニワと思われるが、器形はツボであり、底部に穴はうがっていない。葺石と思われる所の近くにあるので、ツボのハニワへの転用と思われるが、この1例では決め手を欠く。葺石の配置状態もあまりよくない。葺石は地山に乗っているのを確認できた。ただツボの周囲の土は若干質が異なっており、掘りこまれた結果であることはうかがえる。このツボ形ハニワをもう1箇所発掘して、その性格が何であるかを確認しなければならない。石は普通、山石と言われるものである。ツボと葺石の南側は開墾のためか崖になっている。ハニワ片はツボと焼成など

異なり、朝顔形もしくは円筒形と似ており、低い凸帯を有している。凸帯には斜行文等が見られる。

ツボとは異なり、2種類のものがハニワとして配列してあったのか。

(4) その他土器片

壺形とみられる破片2個と甕形とみられるもの1個がある。壺形の1個はごく小片で、残存高約2.5cm、口縁は欠け、頸部立ち上り長さ約1.9cm、周り長さ5.3cm、器壁厚さ約3mmで、小形の壺形土器片である。前方部のほぼ長方形の高み東南隅出土。

口縁の欠けた甕形とみられる土器で、破片の大きさは縦約9cm・横約12cmある。淡赤褐色で、外面にやや斜めのタテハケ(2cm幅につき9本)がつき、内面はヨコハケがわずか残り、ヘラケズリで、地肌やや荒れる。焼成良好、胎土にこまかい砂粒、雲母微粉かごく細い長方形の黒片がひかる。(第28図1)

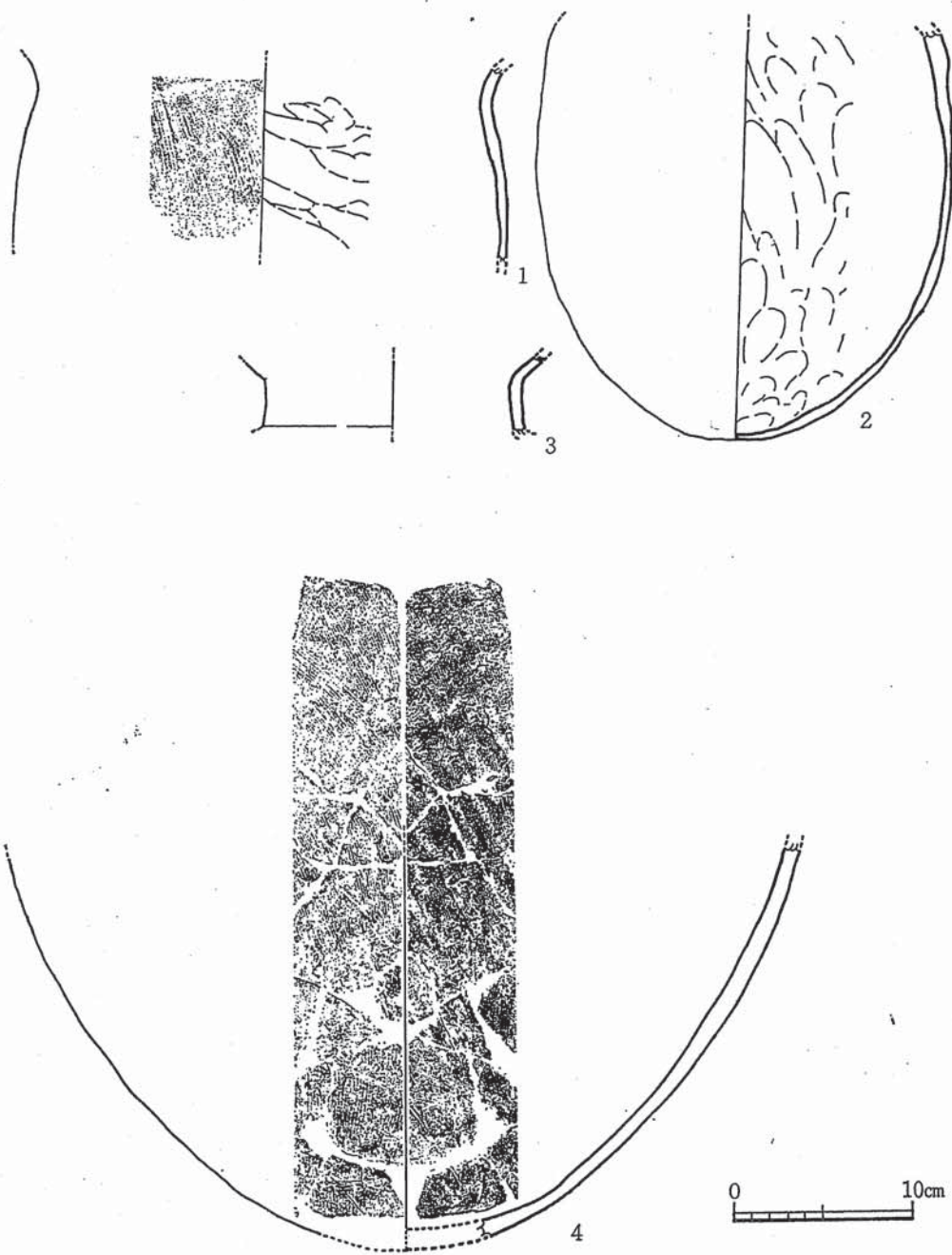
(5) 須恵器提瓶片

前方部上面が削平され、前方部西側墳丘斜面が細長く残された時の緊急調査で、C区の葺石や埴輪片の間にまじり、地表下約30cmに須恵器の提瓶の破片が見出された。大きさ縦8.2cm・横9.8cm・厚さ7mm~1.2cmあり、表面に轆轤の円文がめぐり、ヘラケズリで、裏面はあらい轆轤のあとが中心にやや盛り上がり、右廻りする。色は表面が裏面より少し黒みがかかる。厚手で、はじめ杯の蓋と思ったが、おかしく、提瓶とみればおちつく。古式の須恵器とはみられないようである。葺石や埴輪片の間にまじっていたもので、墳丘築造当時のものかどうか疑問が残る。

須恵器は、墳丘南側Ⅱトレンチで小片1個が採取された。表面に格子目、裏面に線条の叩きがある。厚さ約1.1cm、色は灰白色、甕形土器のものかとみられるが、分からない。

(6) 土師器小皿

後円部墳頂の平坦部東側が斜面となる所で、土師器小皿1個が表採された^⑤。口縁径9.6cm・高さ2.7cm、口縁内面に一部黒く漆を塗ったようなあとがあった。1個だけで、後円部で葬礼かなにかを行なったときのものかどうか明らかでない。



第 28 图

土 師 器

- 註 ① 乙益・田辺・三島・田添「院塚古墳調査報告」熊本県文化財調査報告第6集、1965
- ② 三木文雄「埴輪・鏡・玉・剣」日本原始美術6 参考図版、⑦内行花文鏡、講談社、1966
- ③ 前掲書註②、図版14
- ④ 責任編集坪井、本巻編集田中「4鏡一権力とまつり」日本原始美術大系4、講談社、1977
「拙著御指摘の記述は、小生の解釈でありまして、とくに典拠があるわけではありません。ただし天を蓋笠で象ることは、拙著179頁所引の註9林巳奈夫氏論文にくわしいところです。また円弧間の小単位文が蓋笠あるいは幕の結び紐の表現であることは、漢代の画像石等にもみられるものとはほぼ一致するところから確かだと思っております。」田中琢氏の私信による。—1978・6・28付
- ⑤ 梅原末治「椿井大塚山古墳」副葬の遺物 古鏡2、京都府文化財調査報告第23冊、1964
- ⑥ 後藤守一「古鏡聚英 上篇」図27—6（再版）、東京堂、1977
- ⑦ 山越茂「方格規矩四神鏡考（上）・（中）・（下）」考古学ジャーナル93・95・96、1974
- ⑧ 前掲書註④
- ⑨ 富樫卯三郎「茶臼山古墳出土の鳥獸鏡」石人No.106、1968
- ⑩ 林巳奈夫「鳳凰の図像の系譜」考古学雑誌第52巻第1号、1966
- ⑪ 水野清一、小林行雄編「図解考古学辞典」創元社、1959
- ⑫ 藤・井上・北野「河内における古墳の調査」大阪大学文学部国史研究室報告第1冊、1964
- ⑬ 岡田清子「3 喪葬制と仏教の影響」日本の考古学V、河出書房、1966
後藤守一博士調査の群馬県白石稻荷山古墳や茨城県丸山1号墳の例をひき、古墳時代前期に玉の緒を切る慣習があり、後期に玉の緒を切る呪術的行為の必要が痛感されなくなったとみられる。
- ⑭ 増田精一「1 古代人の葬送観」埴輪の古代史、新潮社、1976
註⑬の見方に対し、死霊への恐怖感だけから前期の宏大な高塚築造が可能であったろうか、縄文期の抱石葬などにみる 制圧呪縛の観念がみとめられても、古墳時代はそうした原始的な時期ではない。玉の緒が切れ、乱れ散ったという表現はあっても、玉の緒を切るという歌は古代歌謡にあるのであろうか、と反論される。
- ⑮ 責任編集坪井、本巻編集金関「武器・装身具」日本原始美術大系5、講談社、1978
図版270 車輪石の説明に「車輪石には、鉄形石や石釧のような碧玉製品は現在のところまだ発見されていない。輪郭が卵形を呈するものには珪板岩製がみられるが、一般には凝灰岩製が多い。」とある。
- ⑯ 前掲書註⑩
- ⑰ 原田大六「続沖の島」宗像神社復興期成会、1961
- ⑱ 三木文雄・小林行雄「伝統工芸と新興工芸—装身具の変遷」世界考古学大系3、1963
- ⑲ 前掲書註⑰
- ⑳ 富田紘一「鹿本町周辺の古墳」鹿本町史、1976
- ㉑ 大塚初重「大和政権の形成—武器武具の発達」前掲書註⑱所収
- ㉒ 伊達宗泰ほか「メスリ山古墳」奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第35冊、1977
- ㉓ 切羽という見方について、熊本大学白木原和美教授のご教示による。
- ㉔ 樞本誠一・山本三郎「城の山・池田古墳」和田山町教育委員会、1972
- ㉕ 前掲書註⑱
- ㉖ 九州歴史資料館亀井明德氏へ問い合わせ、のち熊本大学甲元真之 助教授に前方部西北角出土の埴輪片をおみせした折拓本をとられ、京都へ送られた。川西宏幸氏あてであった。
- ㉗ 早大考古学研究室市毛勲氏のご教示により「大阪文化誌」通巻第8号所載川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」を入手。同志社大生古森政次君により「史林」第56巻第4号 川西宏幸「埴輪研究の課題」コピーを入手。岡山大学春成秀爾講師のご教示により「九州文化史研究所紀要」第23号 横山

浩一「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」、1978を知る。

- ㉔ 伊藤肇二氏作成前田遺跡出土埴輪実測図による。
- ㉕ 壺形埴輪について、富樫卯三郎「弁天山古墳調査概報—新発見の肥後最古の竪穴式石室」熊本史学第30号、1965。同「摺鉢山古墳」宇土市の文化財第3集、1977
- ㉖ 原田大六「三古墳文化が背景となる」日本古墳文化、昭和29年、再版1975、福井式カメ棺と有孔器台の複合説を提唱。
- ㉗ 国越古墳の埴輪は昭和38年筆者が発見、姫ノ城古墳の復原埴輪は昭和47年に筆者・卯野木盈二・井上讓二が発見。
- ㉘ 前掲書註㉔
- ㉙ 前掲川西氏の「埴輪研究の課題」に「スカシの形状にも言及しておく、古墳時代前期には、三角形・巴形・鉤形など多彩であるが、中期以降、円形にはほぼ画一化するらしい。」とある。同氏による円筒埴輪編年の図によると、長方形・三角形はⅠ期（4世紀中葉）Ⅱ期（4世紀後半）にあげられている。また春成秀爾氏の円筒埴輪の編年（7埴輪、地方史マニュアル6考古資料の見方〈遺物篇〉、1977）によると、三角形・長方形はⅡ期（4世紀中頃～後半）からⅣ期（5世紀中頃～後半）へあげられている。
- ㉚ 塚原平古墳の埴輪は昭和53年9月筆者が発見。
- ㉛ 前掲書註㉗川西宏幸氏論文
川西氏の私信による。—1978.8.14付
- ㉜ 富樫卯三郎「熊本県鏡町大塚古墳存在の一証」古代学研究第62号、1972
有佐大塚古墳石室残欠の確認調査は八代郡鏡町教育委員会が昭和53年8月実施。
- ㉝ 昭和53年9月実見。石室残欠確認は前方部。未調査の後円部内部主体とかかわるか。
- ㉞ 西田道生ほか「船山」菊水町教育委員会文化財調査報告書第Ⅰ集、1976
- ㉟ 花岡興輝「八代郡竜北村における土師器の埋没遺跡について」熊本史学第11号、1957
- ㊱ 前掲書註㉔
- ㊲ 前掲書註①
- ㊳ 坂本経堯「阿蘇長目塚」熊本県文化財調査報告第3集、1962
- ㊴ 原口長之『白塚古墳調査報告』プリント版、1956
- ㊵ 野田・松本・島津・江本ほか「塚原」熊本県文化財調査報告第16集、1975
- ㊶ 坂本経堯「鴨籠古墳2号」不知火町史、1972
- ㊷ 置田雅昭「初期の朝顔形埴輪」考古学雑誌第63巻第3号、1977
- ㊸ 三島格「肥後における古墳研究」古代文化第17巻第3号、1966
- ㊹ 前掲書註㉔
- ㊺ 宮崎県立博物館所蔵資料
- ㊻ 川西宏幸氏私信による。
- ㊼ 高橋徹「九州の埴輪概観」二子塚遺跡、1976
- ㊽ 大塚初重・小林三郎「佐賀県空路寺古墳」考古学集刊第四冊、1962
- ㊾ 梅原末治「玉島村谷口古墳」佐賀県文化財調査報告第2輯、1953
- ㊿ 九州大学文学部考古学研究室「老司古墳調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告第5集、1969
- ① 前掲書註①
- ② 高木らの採集資料による。
- ③ 井上正氏の提供による。

第11表

埴輪片分

① 埴輪口縁部片

類	番号	残 存 部			器 面 調 整	
		口 縁 上 下	口 縁 上 半	口 縁 下 半	外 面	内 面
A	1		く字形、残存長3cmの口縁端ややまるく、端面に沈線1本がめぐる。口縁近く内反気味、下端厚さ1.8cm、中凹み、刻みあり。		タテハケ(11)ナデ	ヨコハケにナナメハケ(12、右上→左下)ナデ
	2	く字形、口縁残存長3.5cm、口縁外反、端面ケズリ、厚さ6mm			ハケメ不明 口縁端ケズリ、ナデ	口縁上半ヨコハケかすか、下半もヨコハケ、接合部辺にナナメハケ残る。口縁端面ケズリ
	3		く字形、口縁端磨減するが、端面まるくみられ、内反気味。		ヨコハケかすか	ヨコハケ(11)にナナメハケ、ナデ
	6	く字形にひらき、上下両辺欠け、下端頭部わずか。			不明	ヨコナデ
			く字形、口縁端欠け、下端厚さ1.8cm、中凹み刻みあり。		タテハケ(11)ナデ	ヨコハケにナナメハケ、ナデ
			口縁片、口縁端長さ7.7cm、厚さ6mm		ハケメ不明	ヨコハケ、ナデ、口縁端面ケズリ
			口縁片、口縁長さ約14cm、厚さ6mm		ハケメ不明	ハケメ不明、口縁端面ケズリ
			口縁片、口縁長さ約2cm、厚さ6mm		タテハケ、ヨコハケ	ヨコハケ、ナデ、口縁端面ケズリ
			く字形、口縁残存長約2cm、口縁内反気味、接合部端面消える		不明	ヨコハケかすか、ヨコナデ、接合部指ナデ

類 一 覧 表

焼成	色 調		径	備 考	
	外 面	内 面			
良		淡赤褐色、地肌荒れる。	淡赤褐色		内外両面で上下両辺はナデでハケメ消える。以下の破片ハケメのある場合同様。
良		淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ。	淡黄褐色、口縁上半地肌荒れ、砂粒目だつ。接合部内面に赤色顔料。		
良		淡黄褐色、地肌荒れる。	淡黄褐色	口径34cm	
良		淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ。	淡黄褐色、赤色顔料残る。		
良	黒斑わずか	淡赤褐色、口縁近く地肌荒れる。	淡赤褐色		中凹み、刻みは接合部、1と同一個体か。
良		淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒あり。	淡黄褐色		参考例、前方部西北角西側出土
良		淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ。	淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ。		同 上
良	黒色(口縁端面)	灰色、赤色顔料残る。	淡黄褐色、地肌荒れる。		同 上
良		淡黄黄色、地肌荒れ、砂粒目だつ。	淡黄褐色		

類	番号	残 存 部			器 面 調 整	
		口 縁 上 下	口 縁 上 半	口 縁 下 半	外 面	内 面
			口縁片、口縁長さ5cm、端面まるくみられる。		やや斜めタテハケ(10)	ヨコハケ(10)とめて続く
			残存長5.4cm、口縁欠ける。下端厚さ1.4cm、中凹み、ハケメ様刻み。		ナデ	不明
B	7			残存長6.3cm、上半が多く残る。下半と接合側高5mm、側面ややへこみ、下半へつづく。	上半にナナメハケ(12、右上→左下)ナデ	ヨコハケ(11)
	8			残存長17cm、上半も残る。く字形でなく、接合側高9mm、側面へこみ強まる。	上半にタテハケのあとあり、ナデ	ヨコハケ、ナデ
	9			残存長11cm、上半わずか残る。接合側高8mm、側面へこみ強まり、下端突出気味	ヨコナデ	ヨコハケ、ナデ
				残存長15cm、上半わずか残る。下半と接合、く字形でなく、外反気味。接合部側高約4mmで下半へつづく。	上半にナナメハケ(15)接合部指ナデ、下半ナデ	ヨコハケ(12)にナナメハケ(12、右上→左下)ナデ

焼成	色調		径	備考	
	外面	内面			
		淡赤褐色、赤色顔料わずか	淡赤褐色		参考例
良		淡黄褐色、赤色顔料残る。	淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒あり。		参考例、上の黒色口縁片と同一個体か。中凹みは接合部。出土同じ。
		淡黄褐色、上半に赤色顔料残る。	淡黄褐色、地肌やや荒れ、砂粒あり。		
良		淡黄褐色、地肌荒れる。砂粒大きめ。	淡黄褐色、地肌荒れる。砂粒大きめ。		
良		淡黄褐色、上半に赤色顔料かすか。	暗黄褐色、地肌かなり荒れる。		
良		淡黄褐色、地肌やや荒れる。	淡赤褐色		

② 埴 輪 頸 部 片

番号	残 存 部	器 面 調 整	
		外 面	内 面
4	残存長 13.5 cm, 残存高 5.4 cm。欠けた頸部に口縁下半わずか残る。器壁の厚さ約 1 cm。	ハケメ不明	ナデ
5	残存長約 15 cm、残存高約 5 cm。肩部わずか残る。接合部に灰色の突帯があったとみられる跡あり。	タテハケ、灰色の辺までつく。	ヨコハケ(12) 4 個所とめて続ける。それに一部ナナメハケ。肩部にナナメハケ、それに太めのナナメ刻みところどころつく。
10	半分近く残り、上下接合部で欠ける。残存高 10.6 cm、下端から高さ約 1.5 cm に内弯、上向きの突帯がめぐる。器壁厚さ 1.6 cm	タテハケ(10) にナナメハケ、ナデ、接合部指ナデ。突帯わずかはげたあとにタテハケあり。	ヨコハケ(上方 9、下方 12) 下方とめて続ける。ナデ、オサエ。
	約 9.5 cm × 9.7 cm、上端接合部で欠ける。	タテハケにナナメハケ、ともにかすか、ナナメハケは 3 個所とめて続けたか。ナデ、接合部に指ナデ。	ヨコハケかすか、ナデ
	頸部の突帯残存長 7.2 cm、幅 1.7 cm、内弯し、上向き、先端は円味をもつ。先端で厚さ約 5 mm	ナデ。突帯接合の部分にタテハケのあとあり。	
	約 4.1 cm × 6.7 cm、残存長 3.6 cm、幅約 1.6 cm、突出長 5 mm 三角形の突帯がつく。器壁厚さ約 1 cm	タテハケ一部かすか。	ハケメ不明

③ 埴 輪 肩 部 片

番号	残 存 部	器 面 調 整	
		外 面	内 面
11	5.7 × 9.6、厚さ約 1 cm、下方に接合部わずか。	タテハケにナナメハケかすか、4 本の重弧文状の刻みつく。	ヨコハケにナナメハケ、ナデで消える。
12	6.1 × 9.2、厚さ約 1 cm	タテハケ(12) にナナメハケ(11)	ナデ、指でタテナデ
	9.3 × 6.5、厚さ約 1.1 cm	ナナメハケ(10、右上→左下)	ヨコハケ(10) 幅 3 cm の工具、とめて続く。
	7.4 × 8.8、厚さ 1.1 cm	ナナメハケ(12、右上→左下) にタテハケ、下辺にヨコハケ	ナデ、指でタテナデ

焼成	色 調		径	備 考	
	外 面	内 面			
良		淡赤褐色、地肌荒れ、砂粒が目立つ。	淡赤褐色。	復原径13.2cm	二重口縁
良	接合部突帯はげたか。幅約1.4cmの灰色が帯のようにめぐる。	淡赤褐色	淡赤褐色。	復原径16.9cm	口縁のひらく壺形土器、埴輪か不明。
良		淡赤褐色	淡赤褐色	復原径17.8cm	後円部東斜面出土
良		淡赤褐色	暗黄褐色、地肌かなり荒れる。砂粒あとあり。		上の頸部と同一個体か。
良		淡黄褐色、下面に赤色顔料残る。			埴輪につく突帯として、前方部西北角西側出土
		淡黄褐色、地肌荒れる。	淡赤褐色、地肌荒れる。		参考例、前方部西北角西側出土

焼成	色 調		備 考	
	外 面	内 面		
良		淡黄褐色、赤色顔料かすか残る。		前方部西北角西側出土
良		淡黄褐色	やや暗黄褐色	
良		淡赤褐色、	暗黄褐色	
良		淡赤褐色	やや暗黄褐色	12と同一個体か。

④ 埴 輪 タ ガ 片

類	タ						ガ			焼 色 調		
	番号	残存 長 cm	全幅 cm	上面 幅 cm	突出 長 mm	厚さ(タ ガと 胴 部) cm	器 面 調 整		成	色 調		
							外 面	内 面		外 面	内 面	
A	24	9.5	3.3	2.6	7	1.9	ヨコナデ	ナデ	良		淡赤褐色	暗黄褐色
	25	14	4.2	3.3	7	1.9	ヨコナデ	ナデ	良		淡赤褐色、 一部に赤色 顔料	
	26	19	4.2	3.2	6	1.7	ヨコナデ	ナデ	良	黒斑胴部に あり	淡赤褐色	淡赤褐色
		8	4.2	3.3	9	1.9	ヨコナデ	ナデ、オサエ	良		淡赤褐色、 地肌荒れる	淡赤褐色
B	19	18	5.5	4.8	7	1.9	やや斜めのヨコハ ケ(10)にごく細い ヨコハケ	タテナデ	良	黒斑半ば以 上	淡黄褐色の 間に黒斑	淡赤褐色、 地肌荒れる
	20	11	5.7	4.8	6	1.9	ヨコハケ	ヨコナデ	良		淡黄褐色、 地肌荒れる	淡赤褐色
C	18	7.5	8.2	約 7.5	3	1.5	ヨコハケ(8)にナ メハケ(9、右 上→左下)	ヨコナデ、のち指 でタテナデ3個所	良	黒斑が占め る	淡黄褐色に ずか、地肌 やや荒れる	淡赤褐色 砂粒目だつ
D	21	24	6	4.5 ~5	6	1.7	ナメハケ(14)に ナメハケ(9)格 子状、黒斑に残る	ヨコハケ(12~15) とめ、続ける、3 個所。その上にナ メハケ(12、右 上→左下)、さら に2、3本のユビ でナデ(左上→右 下)めぐる。	良	黒斑一部	淡黄褐色に 黒斑、地肌 やや荒れ、 砂粒目だつ	淡赤褐色

タガと胴部の接合	胴 部					備 考	
	タ ガ		器 面 調 整		ス カ シ 孔		径 cm
	上方	下方	外 面	内 面			
	一部残 存	わずか 残存	上方にタテハケ	わずか ナデ			
	わずか 残存	一部残 存	上方にタテハケ、下方 にタテハケをはさみ、 弧状のハケメあり、そ の上を一部ヨコナデ。	ナデ、オサ エ		26と同一個 体、タガ間 の幅15.7cm	
	わずか 残存	約12cm ×19cm	上方にタテハケ(11) 下方にややナメハケ (15)、タガ直下約6cm の間に弧状のハケメが 右から左へ約2cm幅で 重なり続く。左辺に黒 斑。	ナデ、オサ エ	タガ上方7mmに残存 長縦8mm、横1.7cm 方形スカシ孔、タガ 下方5mmに残存長縦 13cm、横1.7cm方形 スカシ孔	最大径約 33cm(タ ガ上) 25と同一個 体、タガ間 の幅13.7cm	
	わずか 残存	一部残 存	タガの一部胴壁からと れ、ナメハケがみえ る。下方にもナメハ ケ			25、26と同 一団体か	
上方側面板状工具 でナデ、平らか、 ついで胴部ナデ る。下方側面も同 じくナデ、指ナデ も用いたか。タガ 上面両側端おさ れ、やや高まる。	一部残 存	わずか 残存	上方幅約3.5cmやや斜 めのタテハケ(9、右上 →左下)、がわずか重 なりめぐり、右辺でさ らにナメハケが重な りつく。タガ直上ヨコ ナデ、オサエ。下方や や斜めのタテハケ。	ナデ、オサ エ	タガ直上約2cmで、 残存長縦3.3cm、横 9mm方形スカシ孔、 厚さ1.3cm、切込み のあとあり。	径推定約 36cm 前方部西北 角西側崖面 より出土	
同 上	一部残 存	わずか 残存		ヨコナデ		19とよく似 る破片。	
タガ上方側端欠け る。下方側端やや 磨滅するが、ヘラ 状工具で削った か。	欠ける	わずか 残存					
タガ上方側面なだ らかに胴部に続く 下方側面は傾斜や や急。ヒトサン指 とオヤ指で両側を なでたか。	一部残 存	胴部欠 け、ス カシの みわず か残存	上方にわずかタテハケ	上方ナメ ハケの上 指ナデ 下方ヨコハ ケ	タガ下方6mmに残存 長横3cmスカシ孔		

類	番号	タ				ガ						
		残存長	全幅	上面幅	突出長	厚さ(タガと胴部)	器面調整		焼成	色調		
		cm	cm	cm	mm	cm	外面	内面		外面	内面	
	22	17	6.3	5.3	6	1.8	ナナメハケ(14、右上→左下)にナナメハケ(9、左上→右下)格子状	ヨコハケ(13)にオサエ	良		淡黄褐色、地肌やや荒れる	淡赤褐色
D	23	5	7.2	6.5	4	1.6	ナナメハケ(9、右上→左下)にナナメハケ(9、左上→右下)格子状、下端ハケメみだけ、傷つく。	ナナメハケにオサエ	良	黒斑が占める		淡赤褐色
	27	19.5	5.8	4.7	6	1.6	太めのナナメタタキ(7、右上→左下)にナナメタタキ(左上→右下)残る。	ナデ、凹凸あり	良	黒斑わずか	淡赤褐色	淡赤褐色
	28	12	6.8	5.9	6	1.8	太めのゆるやかなナナメタタキに太めのナナメタタキにナナメタタキ、格子状	ヨコナデ	良		淡黄褐色	淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ
E	29	8	6.5	5.8	5	1.4	太めのやや斜めタテタタキハケ(左上→右下)に太めのナナメタタキ(7、左上→右下)格子状	ヨコナデ	良	黒斑わずか	淡黄褐色	淡赤褐色
	30	22	8.3	7.2	6	1.8	太めのゆるやかなナナメタタキ(左上→右下)が目立つ。	ナデ、オサエ、かなりへこむ。	良	黒斑わずか	淡赤褐色、地肌荒れ、	淡赤褐色、地肌荒れ、砂粒目立つ
	31	12	8.8	8.4	5	1.4	太めのナナメタタキ(右上→左下)に太めのナナメタタキ(7、左上→右下)上方は太めのヨコタタキ、格子状。下部わずか外反。	ナデか、不明	良		明淡赤褐色、白みがかかる。地肌荒れ、砂粒目だつ。	明淡赤褐色、白みがかかる。地肌荒れ、砂粒目立つ。
		16	5.7	約5	6	1.9	不明	ナデ			淡黄褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ	淡赤褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ
F		8.5	6.6	6.2	約1.5	3	ヨコナデ	ナデ			淡赤褐色、地肌荒れ、砂粒目だつ	淡赤褐色

タガと胴部の接合	胴 部				備 考		
	タ ガ		器 面 調 整			ス カ シ 孔	径 cm
	上方	下方	外 面	内 面			
タガ上方側面と胴部の接合に板状工具の角でなでる。下方側面は傾斜やや急。	一部残存	わずか残存	上方にやや斜めのタテハケ	ヨコハケ(12)に上方ナメハケ(12)、さらに幅約1cm6本のナメハケ1個所と同じ工具による2個所のハケ	タガ下方8mmに残存長横2cmスカン孔		
タガ上方側面板状工具でナデ、下方板状工具が棒状工具の先でナデ	欠ける	一部残存、両端にわずか黄褐色、器壁厚さ1.1cm	ナメハケ(12、右上→左下)	ナメハケ(12~15、右上→左下)に一部タテハケ		タガ上に鋸歯文状の沈線あり。	
タガ上下両側面板状工具でナデ、タガ上面側端やや高まる。	欠ける	わずか残存	下方にタテハケわずか	ナデ			
タガ上下両側面板状工具でなで、上方側面はややなだらかに指ナデか	わずか残存	わずか残存	タテハケ、ナメハケわずか		タガ下方8mmに横残存長3.5cm、方形スカン孔		
同 上	わずか残存	わずか残存、器壁厚さ1cm	上方にタテハケ(10)、下方ナメハケわずか。	ヨコナデ			
タガ上下両側端板状工具つかい、ユビナデ、タガ上方側面なだらかなら、下方側面ゆがむ	一部残存	わずか残存、器壁厚さ1.1cm	上方にヨコハケ(9)にタテハケ(13)、赤色顔料わずか	ナデ、オサエ		最大径約30cm	
タガ下方側面へラ状工具で削ったか、タガ直下の胴部やや磨滅。	欠ける	わずか残存				後円部墳頂の埴輪基部と似る。	
タガ下方ほとんど欠けわずか工具の先の痕跡残る。	欠ける	一部残存	胴部からタガ上方側面へタテハケらしい痕跡	ナデ	タガ直上1.5cmに三角形スカンの鋭角切り込みあり、器壁厚さ9mm		
タガ上方側面やや残るが欠け、下方側端調整なし。	欠ける	わずか残存	ヨコナデ、オサエ	ナデ、オサエ	タガ直下8mmに残存長横3cmスカン孔、厚さ8mm	異例のタガ。山鹿市チブサン古墳の円筒埴輪に平たくおさえた例あり。	

⑤ 埴 輪 胴 部 片

番号	残存部 cm	厚さ cm	器 面 調 整	
			外 面	内 面
13	13×12	1.1	タテハケ(12)、中ほどナナメハケ。 タテハケ上端にヨコハケ。	やや斜めヨコハケ(12)とめて続く
14	8.5×9		やや斜めタテハケ(11、右上→左下) に同方向のナナメハケ(14)半ばつく	ナナメハケ(12、右上→左下)にナ デ
15	18×13	1.2	ナナメハケ(13)が途中タテハケ(11) となり、ナナメハケ(12)が交叉。	ヨコハケ(12、16)にタテハケ(16)、 ナデ、一部縦に指ナデ
16	7.5×7.1	1.5	あらいタテハケ(5)	タテハケ(7)
17	8×10.5	1.4	タテハケ(12)、ナナメハケ(12)にヨ コハケ(9)	タテハケ(12)ナデ
25	14×9	1.1	ナナメハケにタテハケ(11)	ナデ、縦に指ナデ
	9.3×12	1.4	タテハケにタタキ	ナデ、縦に指ナデ。
	13.5×6	1.1	ナナメハケ(右上→左下)にやや斜め タテハケ(12)	ヨコハケにナナメハケ(13)、ナデ
	12×6	1.1	不明	ナナメハケ(13)、オサエ
	9.5×8.4	1.2	タテハケ(12)上端にヨコナデ	ナナメハケ(15、右上→左下)ナデ、 縦に指ナデ
	5.3×10.7	約1	ナナメハケ(13、右上→左下)	ナナメハケ(15、右上→左下)ナデ
	8.3×5.7	1.7	あらいタテハケ	タテハケ(うち3本太め)にナナメハ ケわずか

焼成	色		調		スカシ孔	備考
	外	面	内	面		
良	黒斑が占める	淡黄褐色	淡赤褐色、白み がかかる	淡赤褐色	ケズリ、縦残存 長11.5cm三角形 スカシ孔、厚さ 1.1cm	やや円弧状に張 り、割れかた縦 が短い。
良		淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	縦残在長7cm、 厚さ9mm	円弧状にやや張 る。
良		淡黄褐色	淡黄褐色 砂粒あとあり	淡黄褐色	ケズリ、縦残存 長16cm、方形ス カシ孔、厚さ1.1 cm	
良		暗黄褐色	暗黄褐色	暗黄褐色		
良	黒斑が一部	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色		
良		淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	ケズリ、縦残存 長9cm、方形ス カシ孔	
良		淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	ケズリ、縦残存 長6.5cm、方形 スカシ孔	やや上辺へカー ブする。
良		淡赤褐色、地肌 荒れ、砂粒あと 目だつ	淡赤褐色	淡赤褐色	ケズリ、縦残存 長9.5cm方形ス カシ孔、厚さ1.2cm	
良		淡赤褐色 砂粒ふくむ	淡赤褐色	淡赤褐色	ケズリ、縦残存 長11.5cm方形ス カシ孔	
良	黒斑が半ば	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色		
良		淡黄褐色、地肌 荒れる	淡赤褐色	淡赤褐色		
良		暗黄褐色	暗黄褐色	暗黄褐色		16の破片と似る

⑥ 埴輪基部片

番号	残存部	器面調整	
		外面	内面
32	約7.5cm×8.7cm、外面底部へかけ内反、やや円味もち、内面はやや外反。底部幅2.2cm、平ら。厚さ上端1.2cm。	やや斜めのタテハケ(10、右上→左上)に円弧状のナナメハケ(10、左上→右下)	ナデ、オサエ。左辺に幅約4cmの板の小口らしいあと
33	9cm×3.5cm、逆Y字形に外面やや張る。底部幅1.7cm、平らで両端やや円味もつ。厚さ1.4cm	タテハケ(9)底部から高さ2cm前後でオサエ、タテハケ重複。	ナナメハケ(9、右上→左下)うち1本は太く、板小口の端か
34	基部半分近く残る。残存高約19cm。底部幅約2.6cm、逆Y字形に、内面巻き上げ成形。底部から高さ3.5cmで器壁厚さ1.1cm。薄めにみえる。	やや斜めのタテハケ(10、右上→左下)に一部交叉するナナメハケ。基部下端わずかヨコナデ	ヨコハケ(10)左から右へ、とめて続け、ナナメハケとなる。他にヨコハケにナナメハケ。ナデ。下端はオヤユビでオサエ、ナデ。底部平ら、凹凸わずか。
35	5.8cm×9cm、逆Y字形に外面かなり張り、底部幅2.4cm、平ら。厚さ2cm。	ナデ	ナデ
	残存長7.4cm、残存高3.1cm、底部幅2.4cm、逆Y字形になり、底部平ら。	ナナメハケかすか	やや弧状のヨコハケ、指でオサエ、ナデ

- 【備考】
- ()内数字は幅2cm内のハケメ、タタキメの本数、但し同一個体でも場所により1.2本増減がある。
 - ()内方向は埴輪片にむかった場合の便宜的なもので、工具のうごく方向ではない。
 - ヨコハケ、ヨコナデが右から左へ、タテハケが下から上へ、左から右へつけられ、ヨコハケBは埴輪技法、ヨコハケCは須恵器技法、タテハケは弥生式土器技法にさかのぼることが指摘されている。(川西氏論文による。)
 - 本表は試案として掲げる。番号は図版のもので、変化の順ではない。欠番は図版のないもの。

焼成	色		調	径	備 考
	外	面	内 面		
良	黒斑かすか。	淡黄褐色	淡赤褐色		
良	黒斑が占める。		淡灰褐色		底部から約3.5cm辺で欠け、巻き上げにかかわるか。
良		明淡赤褐色、白みがかかる。赤色顔料わずか。	明淡赤褐色地肌荒れ、砂粒あり。	復原径34.7cm、残存高19.2cm	基部内面で底部から高さ約3cmに巻き上げとみられる線つく。後円部墳頂東側出土。
良		淡黄褐色	淡黄褐色		後円部墳頂東側出土。
良	黒斑わずかつく。	明淡赤褐色	明淡赤褐色		上記のものと割れめ接合。はじめ高さ約3cmの巻き上げか。後円部墳頂東側出土。

(付) 石蓋土壙

—— 向野田古墳前方部の北方出土 ——

向野田古墳前方部の北方約40m先をブルドーザーが削平し、西側崖面を削った所、穴があり、石蓋土壙の存在が分かった^①。

主軸の方向はほぼ南北で、やや東へ片寄り、4枚の板状自然石を蓋石にする。安山岩とみられる長さ80cm・幅約90cm・厚さ5cmの一番大きな石からやや小さな石が2枚続き、4枚目はそれらよりやや大きく、南側から順に石の端にのせてかけ、東側と西側を小さな石2枚で補なう。蓋石裏面には赤色顔料が塗られる。蓋石の周りに粘土が巻かれる。土壙は長さ上面で1.65m・床面で1.45m、幅南側で上面約47cm・北側で43cm・床面南側で29cm・北側で26cm、土壙の上面・床面ともに側壁に歪みがあるが、舟形状を呈している。深さ南側で30cm・北側で20cm、蓋石は南から北へやや傾斜する。南側壁に接し、高さ15cmで北へ凹みをもちながら傾斜する長さ30cm・幅15cmの粘土枕とみられる高みがある。その辺は赤色顔料もこく目立った。頭部が置かれたものであろう。遺物はなかった。土壙は地山を利用している。

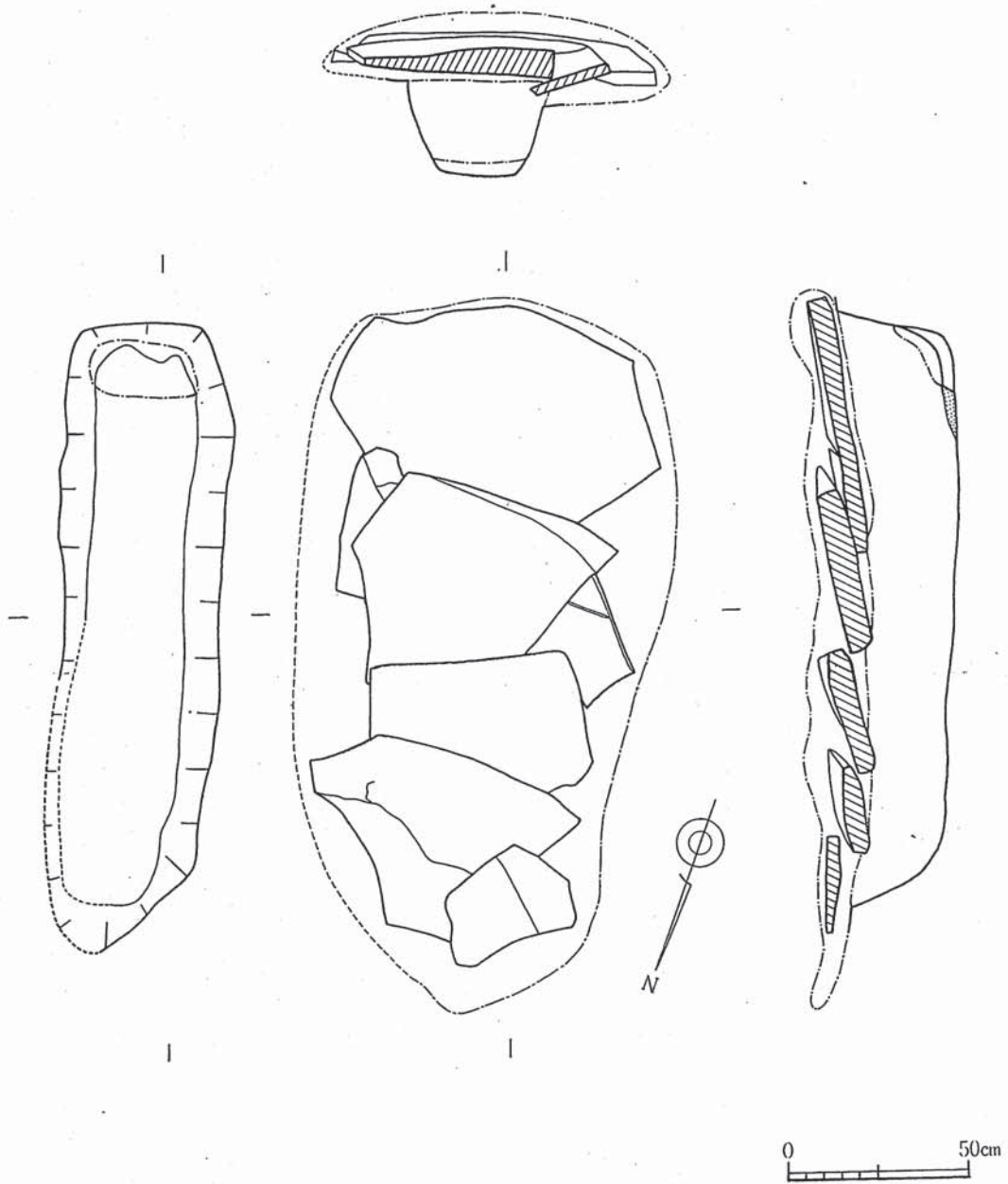
向野田古墳の東北図上直線距離約1.7kmの地点、立岡池に臨む丘陵突端に宇土市花園町榑崎古墳がある。その後円部南北一列に西側小口壁を一直線に揃えた第4棺は石蓋土壙で、もと長方形の箱式を呈し、上面からやや斜めに傾斜し、側壁・床面は箱式となっている。宇土高校社会部で、墳形・石棺実測の折、筆者も土壙を測図した。上面の長さ約1.7m・幅約75cm・床面長さ1.47m・幅東側40cm・西側30cm・深さ約43cmある。蓋石は阿蘇溶岩で板状のものが1枚現存した。

大正11年の京大調査によると、長さ4尺・幅2尺6寸・厚さ2寸5分内外の蓋石があり、一文字蓋とあるのが現存の1枚に当たるのではないかと思われる。他の蓋石はこわれている。「身は蓋の石製なるとは異なり、粘土を固めて作りたる土棺と覚しく、長さ6尺1寸、幅2尺5寸の長方形の堅き土質の中央に縦5尺1寸・横1尺3寸の大きさを1尺2.3寸掘り凹めて遺骸装置の部分形造れる所、我が古式の古墳に往々類例を見る粘土槨と石棺の中間型を示すものとして興味を惹く。」とある^②。

土壙の底の堅さは、向野田の例と似るけれど、蓋石・土壙・枕状の粘土などがうところもある。榑崎古墳は六朝中期かなお降る頃といわれるが、今日6世紀前半に比定される見方がある^③。

向野田の石蓋土壙は、前方後円墳の近く、ほぼ同じレベルにあり、或は関連があったのではないかと思われるが、明らかでない。榑崎古墳の家形石棺3基と石蓋土壙共存の例と異なり向野田古墳の場合、距離的にやや離れている。

石蓋土壙について、土壙の形式に箱形と舟形の2種類をとり上げ、前者が弥生後期から古墳末期にあり、後者が弥生中期から古墳前期におよんでおり、後者の方が基本形かとも思われる



第 29 图

石 盖 土 坟

との指摘がなされている^④。檜崎は箱形でも、上半が外反りになり、箱形と舟形の間にあるともみられ、向野田は舟形に近い。形式的に、石蓋土壙として檜崎より向野田の方がやや古いのではないかと考えられる。

なお宇土市椿原町に、古墳とは離れて、側石1個をそなえた石蓋土壙があった。石蓋は阿蘇溶岩の1枚もので、土壙は舟形であった^⑤。同立岡町西潤野には家形石棺のつく土塚があり、舟形を呈している^⑥。

- 註 ① 昭和43年2月1日暮方、池田組からの連絡で、筆者はただちに向野田へ登り、石蓋土壙であることを確かめた。
- ② 梅原・古賀・下林「宇土郡檜崎の古墳」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第二冊、熊本県、1925
- ③ 昭和50年11月、県指定史跡となる。
- ④ 鏡山猛「弥生式墳墓 4土壙墓」北九州の古代遺跡 第二版、1957
- ⑤ 三島格「宇土市轟榛原における石蓋土壙の一例」熊本史学第15・16号、1959
- ⑥ 富樫卯三郎「宇土市大字立岡西潤野古墳」ともしび第5号、宇土高校社会部、1960